令和５年度

新時代に対応した高等学校改革推進事業

（普通科改革支援事業）

研究実施報告書

第２年次

岩手県立大槌高等学校

巻　頭　言

岩手県立大槌高等学校　校長　継枝　斉

大槌町と連携・協働した高校魅力化事業をはじめて５年、この文部科学省「時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」をはじめてあっという間に２年が経とうとしています。この間、多くの方々のご支援・ご協力をいただき、様々な取組を進めることができましたことに心から感謝申し上げます。

この事業を始める以前、平成30年の冬に大槌町において大槌高校魅力化構想会議が発足し、その時点から町と高校が協働して大槌高校魅力化が進み始めました。同時に平成31年度（令和元年度）から令和３年度までの３年間、文部科学省事業「地域との協働による高等学校教育改革推進事業(地域魅力化型)」に取り組みました。東日本大震災津波に起因する急激な人口流出と少子化、それに伴う生徒数減少と高校統廃合問題、それらの解決策として始まった高校魅力化でした。町の復興の過程の中で、互いに助け合い、生徒も大人に混ざって地域づくりに参加し、生徒たちは学校の中の学習だけでは得ることができない力を育みました。地域や探究活動には計り知れない学びの機会があります。教員は、地域での学びや探究活動によって生徒がどんどん成長していくことを目の当たりにし、生徒も自身の成長をはっきりと認識し自分の発案が地域の何かを変えられることにも気づきました。生徒の資質・能力を育てるために普通科の枠を超えてこの地域協働や探究活動と言った学びの形を更に発展させることはごく自然な流れだと感じます。

こうした背景に接続して始まった本事業は、昨年度に引き続きカリキュラムWG、周知・広報WG、そしてDXWGの３つのワーキンググループ（WG）に分かれて活動しました。カリキュラムWGでは生徒の話し合いやアンケート調査での意見を吸い上げ、学習段階に応じ生徒が選択できる授業や、一次産業から三次産業まで体験する形でのデュアルシステムを構築しました。また、周知・広報WGは各学年の生徒たちの取り組み成果を町内の商業施設や文化交流施設に展示し、本校の取り組みの状況を地域の方々に見ていただく活動を行いました。その結果本校の教育内容に興味を持ち入学の意思を示してくれる中学生が増えてきました。DXWGでは、個別最適な学びに向けてICTを活用した授業を実践し次年度からの授業に生かす取り組みをしました。

新学科の名称については、昨年度から職員会議で話し合い、生徒・保護者の意見集約、魅力化構想会議での意見聴取を経て、いくつかの名称案を県教育委員会に提案した後、10月県議会の承認をいただき「地域探究科」と命名されました。

実践内容については議論を重ねながら進めて来ましたが、通信制高校との併修制など、まだまだ高校単体では出来ないことなどもあり、これから県教育委員会や他の教育機関と協議を深めるなどして実現に向け取り組んでいきたいと考えております。

今年度のこの事業の活動がここまで形あるものにできたのは、忙しい中においても生徒と親身に向き合いながら、この事業を自分事として捉え進めてきた本校教職員と大槌町の役場の皆さん、大槌町議会の皆さんのおかげです。このチームだからこそやってこられたと強く感じております。

末筆になりましたが、地域協働や探究活動に不慣れな我々教職員の行き先を明るく照らし導いてくれた、４名のコーディネーターの菅野祐太さん、小野寺綾さん、星野眞理さん、星野七海さんそして高校側の無理なお願いも聞き、東西に奔走してくださった大槌町教育委員会の皆様に感謝を申し上げ、巻頭の言といたします。

目　次

巻頭言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
目次・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

Ⅰ　研究開発実施報告（概要）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
　令和６年度成果概要図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
　事業完了報告書・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

Ⅱ　研究開発の内容（詳細）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
　１　会議関係　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30
（１） 魅力化構想会議・コンソーシアム会議 ・・・・・・・・・・・・・・ 30
（２） 運営指導委員会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34
（３） 普通科改革研究協議会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37

　２　ワーキンググループにおける検討について・・・・・・・・・・・・・ 43
（１）カリキュラムWGにおける検討について・・・・・・・・・・・・・・ 43
（２）ＤＸ等教育方法検討WGにおける検討について・・・・・・・・・・・ 48
（３）周知・広報WGにおける検討について・・・・・・・・・・・・・・・ 49

　３　学校設定教科・科目 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 53
（１）三陸みらい探究（総合的な探究の時間）・・・・・・・・・・・・・ 53
　　ア　１年生の取組・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 54
　　イ　２年生の取組・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 71
　　ウ　３年生の取組・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 82
（２）学校設定教科　「地域みらい学」・・・・・・・・・・・・・・・・ 91
　　ア　ひょっこり表現島（国語）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 91
　　イ　まちづくり探究（地歴公民）・・・・・・・・・・・・・・・・・ 92
　　ウ　くらしｍａｔｈ（数学）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 93
　　エ　おおつちラボ（理科）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 94
　　オ　Ｅパスポート（英語）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 95

　４　目標の進捗状況、成果、評価・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 96
（１） 資質・能力調査について　　・・・・・・・・・・・・・・・・・ 96
（２） ルーブリックを活用した評価について　・・・・・・・・・・・・ 99

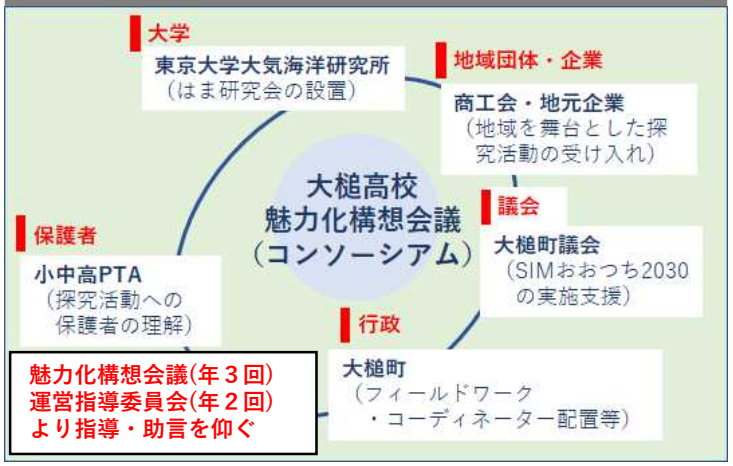
Ⅲ　参考資料　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 101
　◇目標設定シート ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 102
　◇学校評価システムによる評価結果 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 103
　◇令和６年度入学者の在学期間の教育課程 ・・・・・・・・・・・・・ 106

Ⅰ　研究開発実施報告（概要）

【岩手県立大槌高等学校】地域社会学科（学科名：地域探究科）（令和６年度設置（予定））

事業構想	「大海を航る大槌（ハンマー）を持とう」を実現し、「学ぶことが楽しい」「もっと学びたい」と思う魅力的な学びの環境を地域と共に創る
事業目的	・多様な学びを保障する個別最適化されたカリキュラムの実現 ・復興を担う人材の育成、社会教育の拠点としての高校の実現
特色･魅力ある教育の概要	①生徒自らが選択・調整できる学び ②地域社会を舞台に学ぶ実践的な問いからはじまる ③放課後等の学校外に広がる探究的な学び ④個別最適なリメディアル教育の実践

関係機関との連携・協働体制の構築方法



令和５年度の目標

①新学科開設に向けて校内体制の整備
ア）デュアルシステム、社会教育の単位認定、セルフラーニングタイムを中心とするカリキュラム開発
イ）個別最適な学びについての検討
ウ）中学生とその保護者・地域に向けて新学科の効果的な周知

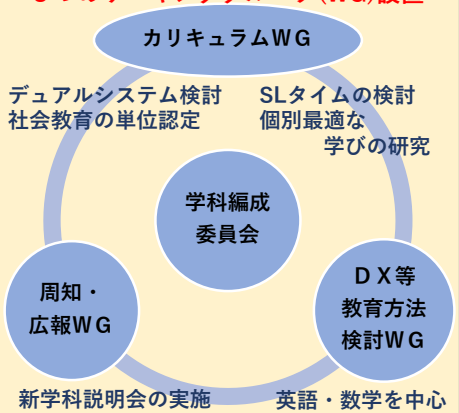
②地域を題材とした探究の実践と充実

③先進校事例の収集と情報交換の実施

④コーディネーターの有機的活用

取組状況

①全教員からなる３つのワーキンググループ(WG)設置



②地域を題材とした探究の実践と充実
・地域探究の取組を町議会、地域公民館で発表し、地域の声を聴く機会を得た。

③先進校事例の収集と情報交換の実施
・全国の13校と交流を深めた。

④コーディネーターの有機的活用
・探究活動の企画、推進役として、地域協働を推し進めた。CDN研修参加。

成果と課題

①全教員からなる３つのワーキンググループ(WG)設置
成果：新学科設置に向けて全教員が事業に主体的に関わる体制作りの構築（全体）
カリキュラム完成に向けて４つの小WG内（デュアルシステム、社会教育の単位認定、セルフラーニングタイム、個別最適な学び）で検討（カリキュラム）
生徒・保護者の声を受けた個別最適な学び（英語・数学）の検討（ＤＸ）
取組展示の機会増加、近隣中学校への学校説明会範囲の拡大（周知・広報）
課題：教員異動に伴う教員間の温度差を埋めるための円滑な取組の継承（全体）
デュアルシステム、社会教育の単位認定に向けた関係機関との調整（カリキュラム）
個別最適な学び（英語・数学）の授業化に向けた教員間の連携（ＤＸ）
地域の小中学校教員に新学科に関する理解をいかに深めてもらうか検討（周知・広報）

②地域を題材とした探究の実践と充実
成果：生徒自ら地域に出て、地域の人々の前で発表し、協働することで、自らの人生を切り拓き、挑戦しようとする生徒の増加
課題：地域との協働が進むほど、特定の生徒・グループに負荷がかかってしまう

③先進校事例の収集と情報交換の実施
成果：多くの学校と探究活動、地域との連携、教育課程、職業体験、県外留学について意見交換を行い、本校の教育活動にいかせた
課題：より多くの教職員が他校交流に参加する機会の創出

④コーディネーターの有機的活用
成果：探究活動のさらなる充実を図り、地域と学校を繋ぐ役割を担った
課題：事業終了後も継続配置できる予算措置とコーディネータースキルの教員への伝達

⑤高校魅力化評価システムの調査結果
成果：やりたいことの増加、社会性、チャレンジの気持ち、協働性のウェルビーイングが高値となり魅力的な学びの環境を地域と共に創るという構想の具現化を確認できた
課題：調査時期が大幅に早まったことで前年同時期比較ができなかった

様式第６

事業完了報告書

令和６年３月 31 日

支出負担行為担当官
文部科学省初等中等教育局長　殿

（受託者）住　　所　岩手県盛岡市内丸 10 番１号
名称及び　岩手県知事
代表者名　達　増　　拓　也

令和５年４月１日付け、新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）は、令和６年３月 31 日に完了したので委託契約書第 10 条の規定により、下記の書類を添えて報告いたします。

記

１．事業結果説明書（別紙イ）

２．事業収支決算書（別紙ロ）

（別紙　イ）

事業結果説明書

1　事業の実績（令和５年度）

（1）事業の実施日程

事業項目	実施日程（令和４年７月８日～令和６年３月 31 日）											
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
カリキュラムや教育方法等の検討・開発・実施												
カリキュラム開発会議	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
DX 等検討会議	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
周知・広報検討会議	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
フィールドワーク				●			●	●	●			
教員研修（個別最適な学び）										●		
関係機関との連携協力体制の構築・維持												
運営指導委員会				●								●
コンソーシアム（魅力化構想）会議				●				●			●	
大槌発未来塾							●					
コーディネーター												
コーディネーター（菅野祐太・小野寺綾氏）	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
コーディネーター(星野七海・星野眞理氏)	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
新学科設置に向けた説明会等の実施												
高校説明会（中学生・保護者）				●								
オープンスクール					●	●						
新学科説明会（地域住民）							●					
成果発表・成果普及												
探究発表会								●			●	
マイプロジェクトアワード										●		
大槌町議会発表会											●	
これからの大槌高校を考える会								●				
成果検証												
高校魅力化評価システム				●	●				●	●		
アンケート調査		●								●		

（別紙イ）

（２）カリキュラムや教育方法等の検討・開発・実施

事業項目	実施日程
第５回学科編成委員会（検討テーマに関する協議）	4月24日(月)
第６回学科編成委員会（令和５年度の計画）	6月19日(月)
第７回学科編成委員会（協議及び報告）	12月22日(金)
第８回学科編成委員会（協議及び報告）	1月30日(火)
第９回学科編成委員会（協議及び報告）	2月28日(水)

３つのWG（ワーキンググループ）における検討			
会議	カリキュラムWG	DX等教育方法検討WG	周知・広報WG
第１回	6月14日(水)	8月29日(火)	6月6日(火)
第２回	9月1日(金)	11月9日(木)	6月19日(月)
第３回	10月18日(水)	11月30日(木)	9月5日(火)
第４回	11月7日(火)	12月8日(金)	9月11日(月)
第５回	11月17日(金)	12月15日(金)	11月1日(水)
第６回	12月12日(火)	12月20日(水)	11月9日(木)
第７回	1月22日(月)	1月22日(月)	1月29日(月)
第８回	2月2日(金)	2月2日(金)	2月9日(金)
第９回	3月15日(金)	2月28日(水)	3月15日(金)

（３）関係機関との連携協力体制の構築・維持

事業項目	実施日程
第１回コンソーシアム（魅力化構想）会議（指導・助言・訪問指導） 令和４年度事業報告並びに令和５年度事業計画を協議、承認	7月6日(木)
第１回運営指導委員会（指導・助言・訪問指導）	7月7日(金)
第２回コンソーシアム（魅力化構想）会議（指導・助言・承認・オンライン指導） 「これからの大槌高校を考える会」100名を超える地域住民、生徒、保護者、教職員等が参加し、熟議	11月22日(水)
第３回コンソーシアム（魅力化構想）会議（指導・助言・承認・訪問指導） 令和５年度事業報告・総括及び令和６年度事業計画を協議	2月27日(火)
第２回運営指導委員会（指導・助言・承認・訪問指導）	3月25日(月)

（４）新学科設置に向けた説明会等の実施

事業項目	実施日程
高校説明会（大槌高校）	7月28日(金)
第１回オープンスクール（大槌高校・東京大学大気海洋研究所・おしゃっち）	8月19日(土) 20日(日)
第２回オープンスクール（大槌高校・東京大学大気海洋研究所）	9月30日(土)
新学科説明会（新学科設置に関する地域説明会）（おしゃっち）	10月2日(月)

（５）高等学校における実施体制（成果発表・成果普及・フィールドワーク）

事業項目	実施日程
三陸みらい探究　学校横断型探究プロジェクト 「第１回オンライン合同授業「探究テーマ交流」 連 携 校：北海道鹿追高等学校、静岡県立川根高等学校 参加生徒：113 名（本校と上記高校を合わせた３校の２年生） 実施内容：１年間のオンライン探究連携についての説明と交流	６月７日(水)
三陸みらい探究「マイプロジェクト・フィールドワーク」 発表生徒：55（２年生） 講師：町内の社会人 31 名 内容：プロジェクトテーマに関する体験活動、インタビュー	７月 19 日(水)
総合的な探究の時間「大槌発未来塾」 参加生徒：１年生 56 名　２年生 52 名 講師：株式会社 DMM　筒井 千春 氏 大槌学園　三浦 翔太 氏 NPO法人おおつちのあそび代表　大場 理幹 氏 東京大学附属病院　佐藤 駿一 氏 大槌町役場 学務課　平野 正晃 氏 一般社団法人おらが大槌夢広場　黒澤 亜美 氏 城山観光　松橋 康弘 氏 株式会社邑計画事務所　及川 一輝 氏 つつみこども園　芳賀 カンナ 氏 一般社団法人えがお　松﨑 実穂 氏 内容：社会人による人生講話	10 月 10 日(火)
おおつちラボ「岩手大槌サーモン養殖に関する取組」についてのフィールドワーク 参加生徒：35 名（３年生教養コース） 講師：大槌町産業振興課一次産業活性化班　黒澤勉氏 視察協力：大槌復光社協同組合　桃畑養殖場	10 月 24 日(火)
総合的な探究の時間「SIMulation おおつち町内フィールドワーク」 参加生徒:１年生（58 名） 役場協力：大槌町産業振興課、消防課 企画財政課、協働地域づくり推進課 視察協力：大槌町藻場再生協議会　鎮魂の森工事場所・旧庁舎 大槌商工会 MOMIJI 株式会社　NPO 法人吉里吉里国　消防団員の皆様 内　　容：大槌町の行政事業に関するヒアリング、地域課題 に関連する視察先での調査活動	10 月 31 日(火)
総合的な探究の時間「マイプロジェクト中間発表会」 発表生徒：２年生（54 名） 内　　容：地域住民に対するマイプロジェクト中間発表会 場　　所：大槌町沢山地区集会所、中央公民館安渡分館、中央公民館赤浜分館 吉里吉里公民館、文化交流センター（おしゃっち）	11 月８日(水)

三陸みらい探究　学校横断型探究プロジェクト 「第２回オンライン合同授業「探究テーマ交流」 連 携 校：北海道鹿追高等学校、静岡県立川根高等学校、私立中村高等学校 参加生徒：140 名（本校と上記高校を合わせた４校の２年生） 実施内容：各自の探究活動を紹介し意見交換を実施	11 月 17 日(金)
まちづくり探究「若者の投票率低下」についてのフィールドワーク 参加生徒： 35 名（３年生教養コース） 内容：大槌町選挙管理委員会への聴き取り調査	11 月 30 日(木)
SIMulation おおつち「ラーニングジャーニー」参加生徒：１年生（52 名） 視察先：大船渡市、陸前高田市、宮古市、久慈市、一関市、気仙沼市 内　容：自治体・民間団体の地域課題解決に向けた取組視察	12 月５日(火)
マイプロジェクトアワード 2023 岩手県 summit　参加者：１・２年生 17 名 場所：岩手県立大学	１月 21 日(日)
まちづくり探究「若者の投票率低下・議員の候補者不足」についてのプレゼンテーション 参加生徒： 35 名（３年生教養コース） 内容：大槌町選挙管理委員会へのプレゼンテーション	１月 22 日(月)
三陸みらい探究「“ 私が 18 年間で身に付けた大槌と知見 ” 発表会」 発表生徒：51 名（３年生） 内容：18 年間の学びを総括したプレゼンテーション	２月 12 日(月)
三陸みらい探究　学校横断型探究プロジェクト 「第３回オンライン合同授業「探究テーマ交流」 連 携 校：北海道鹿追高等学校、静岡県立川根高等学校 参加生徒：117 名（本校と上記高校を合わせた３校の２年生） 実施内容：１年間の探究連携のまとめと発表・ゲストサポーターの質疑応答	２月 14 日(水)
SIMulation おおつち「議会発表会」参加生徒：１年生（　名） 場　所：大槌町役場議場 内　容：大槌町議会に対しての地域課題解決に向けた取組発表	２月 20 日(火)
探究発表会・研究協議会「大高生の“ 大槌（ハンマー）”聴きに来てけでさフェスタ 2024」 場　所：大槌町文化交流センター（おしゃっち） 参加者：学校関係者以外 136 名（町内 75 名、町外 61 名）、教職員 22 名、生徒 111 名 内　容：オープニング「18 年間で身に付けた“ 大槌（ハンマー）” 発表（３年生７名）」 第１部「大槌町の課題解決アイデア発表会（１年生）」（生徒 55 名） 第２部「マイプロジェクト活動成果発表会（２年生）」（生徒 49 名） 第３部「研究協議会『大槌高校地域探究科の未来を語り合う』」 講　師：寺脇　研氏（映画評論家・京都芸術大学客員教授） 細田眞由美氏（前さいたま市教育長・東京大学公共政策大学院講師 ・兵庫教育大学客員教授）	２月 23 日(金)

2　事業の実績の説明

（1）カリキュラムの検討内容

ア　新学科開設に向けて特色・魅力ある先進的なカリキュラム開発

新カリキュラム開発はカリキュラム WG を中心に進めており、以下に検討内容を記載する。

（ア）探究的に学ぶ科目の充実…これまで本校で研究開発を進めてきた総合的な探究の時間「三陸みらい探究」、学校設定教科の「地域みらい学」の深化に加えて新規の探究科目の設定及び既存教科においても探究的な学びを深めていく。

（イ）科目選択の自由度向上…大槌高校として学んでほしい必履修科目を学んだ上で、進学・就職に関係なく生徒自ら学びに合わせて選択できる学校設定科目を準備する。

進学希望者には、より大学進学に特化したカリキュラム選択が可能で、学習に不安がある生徒は、数学・英語で中学校の復習から始まる復習科目を選択できる。また、学校設定科目の選択の幅が広がった他、進学希望者が３年次まで芸術を選択できるようにする。

（ウ）復習科目の充実（リメディアル）…数学・英語については、リメディアル科目を配置し、必要に応じて自由に選択が可能となる。１年次は中学校の復習から開始し、学びの再体験を図り、２年次から３年次については、自分の学びの目標や進度に合わせて学習し、学びを高め、自ら学ぶ力の育成を図る個別最適化された学習の実現をめざす。

（エ）キャリア教育の充実…２年次にデュアルシステムを導入し、第１次から第３次産業までを体験するインターンシップを年４回実施する。また、地域と協働しての商品開発や販売、就職実践講座、年間の活動報告を企業関係者に対して行うことを企画する。

（オ）社会教育の単位認定…令和７年度からは、生徒の社会教育での学びも高校生活における重要な学びとして単位化する予定である。具体的には、震災後から活動している「復興研究会」での活動、東京大学大気海洋研究所と連携した「はま研究会」での活動、地域行事のボランティア活動への参加の単位化を考えていく。

（カ）授業のオンライン履修の一部認可…限定的にオンラインでの履修を認めることで、生徒の学び方に合うような履修方法を検討する。教室に入ることができない生徒の学びの保障や本校で開講できない科目について外部の授業をオンライン受講することが想定される。

（キ）セルフラーニング…３年次にセルフラーニングタイムを設け、学びや活動の時間を自己プロデュースできるようになることをめざす。

イ　新カリキュラム開発の課題

（ア）科目選択の自由度が高まれば教員のコマ数が増加するため、小規模校の人員でどうカリキュラム編成するかが課題となり、教員加配が望まれる。

（イ）第１次から第３次産業別職業体験導入にあたって、受け入れ先の企業・機関・団体があるか確認が必要。

（ウ）セルフラーニングタイムを選択した生徒のサポート体制について検討が必要。

（エ）オンライン履修を認めた際、授業に参加しない生徒増も考慮して慎重な検討が必要。

ウ　総合的な探究の時間及び学校設定科目について

（ア）地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け

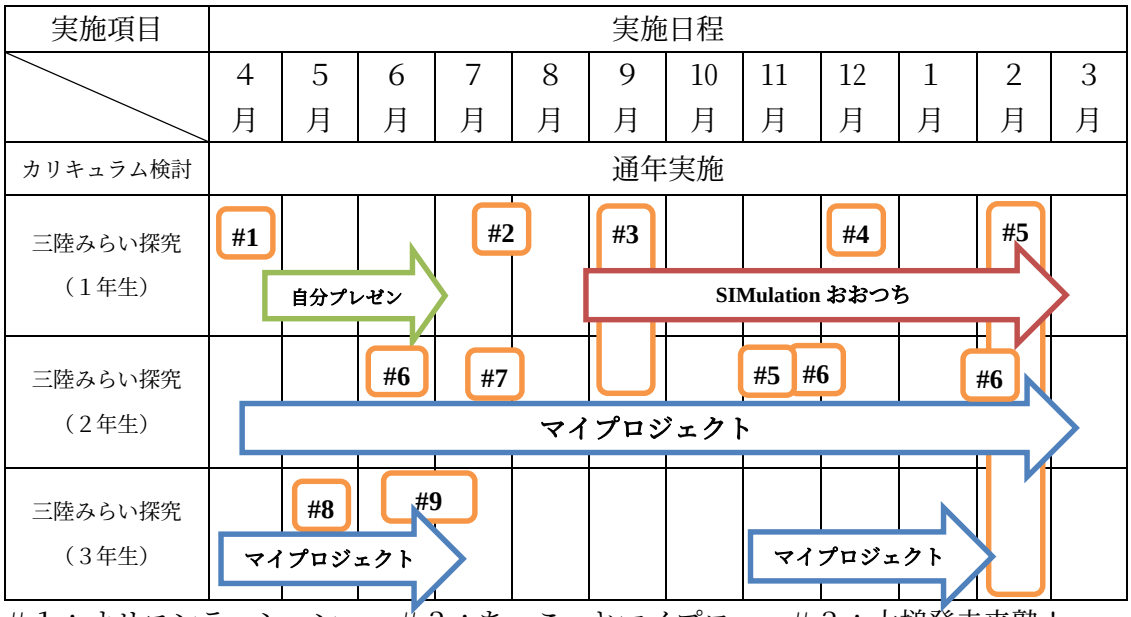
令和元年度より「総合的な探究の時間」の先取りで「三陸みらい探究（５単位）」という学校設定科目を策定した。なお、令和４年度入学生からは「総合的な探究の時間（５単位）」を設置している。また、令和３年度からは５教科においても探究的な学びを教科横断的に実践する学校設定科目「ひょっこり表現島」「まちづくり探究」「くらしｍａｔｈ」

「おおつちラボ」「Ｅパスポート」を設置した。探究的な学びを実践する５つの学校設定科目では各科目の特性を活かしながら地域課題を考え、解決方法を模索・表現することを目的としている。なお、本校ではこれら５教科の学校設定科目を総称して学校設定教科「地域みらい学」と呼んでおり、新学科における学校設定科目の中心に置く予定である。

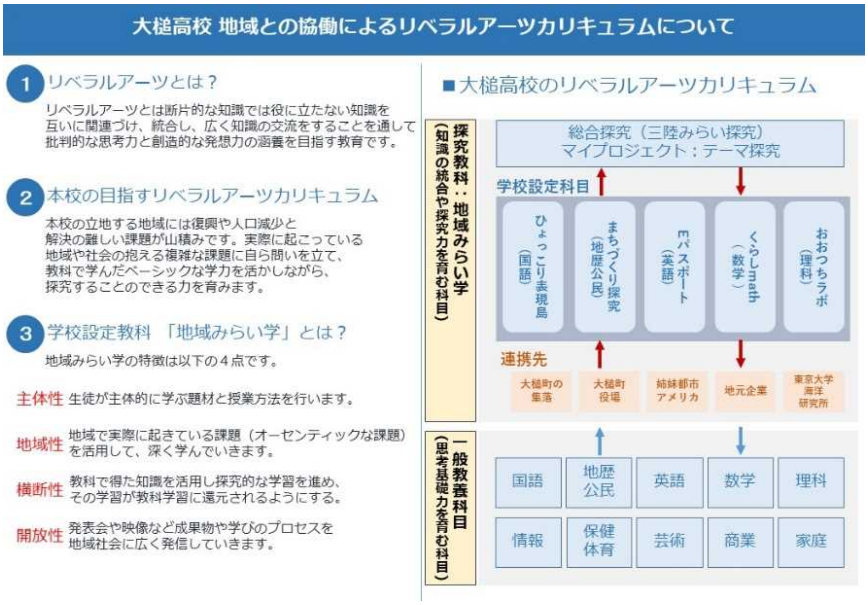
（イ）総合的な探究の時間、学校設定科目のカリキュラム開発体制について

地域連携は、地域協働学習実施支援員が中心となり週１回学年ごとに探究活動の進捗を確認・検討している。この検討には校内に配置されているコラボスクール（公営塾）のスタッフも参加している。５つの学校設定科目についても定期的に授業公開や教員研修会を開催し指導内容・方法を情報共有している。

（ウ）総合的な探究の時間、学校設定科目実施日程



＃１：オリエンテーション　＃２：ちょこっとマイプロ　＃３：大槌発未来塾！
＃４：ラーニングジャーニー　＃５：探究発表会　＃６：学校横断型探究プロジェクト
＃７：マイプロジェクトフィールドワーク　＃８：職業インタビュー
＃９：アカデミックオンラインディスカッション



（エ）総合的な探究の時間、学校設定科目の内容について

① 総合的な探究の時間、学校設定科目「三陸みらい探究」による資質・能力の育成

［１年生の活動］

総合的な探究の時間（２単位）で実施

時　期	内　容	各単元のねらい（連続性）
５月～７月	<u>自分紹介プレゼンテーション</u> 探究を進めていくために必要な課題設定力を育むために、自己発見・自己理解を通して自分なりの視点を獲得した。自分を紹介するプレゼンテーションを作成し、町内の中学生を校内に招いて発表した。	**［表現し内省する］** 相手に伝わるよう表現することを通して、自己を内省する。
７月～９月	<u>１週間マイプロジェクト</u> 自分が普段気になっていることやチャレンジしてみたいことをテーマに、１週間で実施できるプロジェクトを企画し、アクションを通して解決できたことを振り返った。	**［課題解決の枠組みを知る］** 身近なテーマで小さなプロジェクトを実践し、課題解決の方法を知る。
９ 月～２月	<u>SIMulation おおつち</u> 理想とする町の姿を考え、町内にある地域課題の解決策を構想した。地域課題は、町の総合計画に掲げられた分野に沿って大槌町議会に設定していただいた。10・11 月には課題の理解を目的に、大槌町議会議員による講義や、町役場に対するヒアリング調査を実施した。12 月には解決策の先進事例を知ることを目的に、町外の自治体や民間団体を訪問し、フィールドワーク調査を実施した。２月に、議員や役場職員、地域住民に対して解決アイデアを発表した。	**［地域課題を知り、解決のための方策を考える］** 町内の地域課題を題材に、課題解決のための方策を考え、提案を行う。
10 月	<u>大槌発未来塾！</u> <u>町内外で働く大人 10 名が取り組むマイプロジェクトを聞き、今後の進路や、地域社会との関わり方について考えた。</u>	**［生き方を考える］他者の生き方に触れることを通して、自らの生き方について考える。**

［２年生の活動］

総合的な探究の時間（２単位）で実施

時　期	内　容	各単元のねらい（連続性）
５月~８月	<u>マイプロジェクト①テーマ設定</u> 短期間でのプロジェクト活動や大人への相談活動を通して、個々人の興味関心あるテーマを発見し、探究したい問いを設定した。 **・マイプロジェクト・フィールドワーク** 自分のテーマと似た活動に取り組む地域の方を訪ねて、体験活動やアドバイスをもらうフィールドワークを実施した。	**［マイプロジェクト探究に向けた課題を設定する］** 個人の興味関心あるテーマを発見し、探究したい問いを設定する。
９ 月～２月	<u>マイプロジェクト②課題解決アクション実践</u> 課題解決に向けたアクションを行いながら設定した問いを探究することで、課題解決を行う資質能力を総合的に育成した。定期的に成果報告の機会を設け、考えを相手に伝える力を高めた。 **・ ゼミ活動（９月～１月）** 課題設定から解決策実施までの流れを繰り返した。テーマに応じて	**［アクションを通して課題解決を学ぶ］** 課題解決を行う資質能力を総合的に育成する。

	ゼミに分かれ、教員が分担して生徒の活動を支援した。また 10 月には活動の途中経過を発表する中間発表会を校内で実施した。 **・中間発表会（11 月）** 町内各地区の公民館において、半年間の活動の成果をプレゼンテーションにまとめ、地域住民の前で発表した。 **・学校横断型探究プロジェクト（6月・11 月・2月）** 北海道・静岡県・東京都の小規模校とオンライン接続し、互いの活動について発表しフィードバックする交流活動を定期的に実施した。 **・最終発表会（2月）** １年間の活動の成果をプレゼンテーションにまとめ、町民の前で発表した。	
10 月	**大槌発未来塾！** 町内外で働く大人 10 名が取り組むマイプロジェクトを聞き、今後のプロジェクトの発展や卒業後の進路選択に役立てる機会とした。	**［地域と探究を接続する］** 地域課題解決のモデルケースに触れ、マイプロジェクトに活かす。

［３年生の活動］　　学校設定科目「三陸みらい探究」（１単位）で実施

時　期	内　容	各単元のねらい（連続性）
４月～７月	**アカデミック・オンラインディスカッション（大学・短大進学、公務員希望生徒）** ２年生のマイプロジェクト探究で取り組んだテーマをさらに深めることを目的に、論文等を読みながら新たな問いを設定した。問いを深めるために議論したい専門家に依頼し、４～５人グループでオンラインディスカッションを実施した。 **職業インタビュー（専門学校進学、就職希望生徒）** 就きたい職業に必要な能力を理解することを目的に、生徒が関心ある職業人にインタビューを実施した。自分の現状と就きたい職業に必要な能力とのギャップや課題を把握し、今後身に付けたい力について構想した。	**［マイプロジェクトを進路に繋げる］** マイプロジェクトでの探究活動を軸に卒業後の進路を考え、必要な力を育成する。
11　月～２月	**18 年間で身に付けた“大槌(ハンマー)”と知見** オープンダイアログや人生グラフの作成を通して、各生徒が 18 年間の人生で身に付けた“大槌(ハンマー)”＝強み　を自分の言葉で表現した。また、身に付けた“大槌”や知見をプレゼンテーションにまとめ、探究活動等で関わった地域の方をはじめ、これまでお世話になったになった方々に向けて発表した。	**［探究での学びを総括する］** これまでの探究活動や学びを整理し、自分なりの言葉で表現する力を身に付ける。

※課題や改善点について

今年度は、１年生の活動において、SIMulation おおつちの発表会を大槌町議会の議場を会場として実施した。また、２年生の活動において、中間発表会を町内の公民館を会場として実施した。その結果、例年より発表に対する意欲が生まれ、発表後に地域からいただく助言の量も増えた。今後も、日頃の活動だけでなく、発表会を地域に開くという取組は継続していきたい。

② 学校設定教科「地域みらい学」の実施

総合的な探究の時間の代替である三陸みらい探究を軸にして、５教科に探究的な学びを実践する科目を設定した。学校設定科目ではそれぞれの教科の特性を踏まえながら、必要に応じて科目を横断的に接続しながら地域課題探究に取り組む。

科目名 学年・単位数	今年度の取組	今後の取組
ひょっこり表現島 ２年生 ２単位	［方言の多様性を感じる活動］ 全国で使用される方言を聞いたり、方言で読まれた文学作品を鑑賞したりすることにより、方言の多様性を感じる活動を行った。 ［方言創作］ 既存の作品を「大槌の方言」や「岩手の方言」でリメイクしたり、オリジナルのカルタを作ったりする活動を行った。自分たちが使用している方言を用いながら創作活動を行うことによって、方言の面白さに触れ、同じ地域でも多様な表現があることに気づくような活動を行った。冬休み前までにリメイク作品を完成させ、冬休み中に地元の方言プロである高齢者の方々に添削をしてもらってブラッシュアップを図った。さらに、ブラッシュアップしてもらった作品を用いて、高校生が小学生に向けて授業を行うコラボ企画を行った。今後、カルタについては大槌町の図書館に設置する予定。	・今回は「書くことによる表現」に焦点を当てて創作活動を行ったが、コントや演劇などの「話すことの表現」活動にも幅広く応用できると感じられた。生徒の発表力や表現力をどのように伸ばすのかを考え、柔軟に検討したい。
まちづくり探究 ３年生 ２単位	４月から６月は、チームとして話し合うために必要なことや資料の読み解き方を学んだ。「犬と猫どちらを飼うべきか」というテーマで話し合った。６月から９月は、データの読み解き方を学び、「マンガの原作をアニメ化すべきか」、「大槌町にどのような公園をつくりたいか」というテーマで話し合った。９月から 11 月は、学校の課題について考えた。現在学校生活で問題と思われることを各グループでアンケート等の根拠をもとに主張し、校長へのプレゼンテーションを行った。11 月から３月は町の課題について考え「若者の投票率を上げるにはどうしたらいいか」、「立候補者を増やすにはどうしたらいいか」について解決策を考え、町の選挙管理委員の方にプレゼンテーションを行った。	・今後も、導入は身近な問いにしながらも、最終的に民主主義制度や人権について考え、町政や復興に関わること、意思決定などについて考える機会を設けたい。
くらし math ２年生 ２単位 ＊令和５年度は開講せず	前期は、「根拠を持って判断をする」ための演習として、客観的なデータや数値に基づいて判断をする場面（生活費、コマづくり等）や、最適解がみつからない問に対して複合的な視点で考える場面（求人票の比較, 宝くじの分析等）を設定し、学習した。また、データを用いて探究するための基礎技能として、グラフの活用・アンケート調査・Excel の扱い方について学んだ。 後期は、グループ毎に自由に問を立て、統計・データを活用し考察するレポート課題に取り組んでいる。「大槌町と塩分摂取量」「大槌町の遊ぶ場所と満足度」「大槌で再開された祭への参加」などの町と関連したテーマでレポートを進める班も出てきた。	・地域に目を向けられるグループには、よりよい地域のデータを得られるよう支援する。 ・集約データから知見を得て、次の問い・調査に繋げる部分の伴走をする。

Eパスポート ２年生 ２単位	前期で身に付ける資質能力をジブンゴト・課題設定と置き、ネイティブスピーカーの故郷であるカナダ・トロントに「留学をしてみる」ことをテーマに、税関、ホテル・ホストファミリー、医療機関、買い物など様々な場面を設定して会話練習を行った。ドルから円（その逆も）への計算も英語で行った。生徒たちは自分の伝えたいことを英語にして、英語を母語にする人にもコミュニケーションを取ることができることを学んだ。また、前期の最後では海外で働くための面接試験を英語で行い、英語をとおして自分の進路に必要なことを考えさせた。 後期は今後留学生に自分の学校や町、さらに岩手県を英語で紹介する場面を設定したり、異文化理解をテーマに英語圏の校則や、クリスマス、正月の過ごし方についてゲストを招いて学んだりした。また、バレンタインの本当の意味についても Khoot!を利用しながら楽しく学んだ。	・外国人に向けた大槌の紹介映像やHPの英語版製作に取り組みたい。また、より身近なテーマについて英語で表現する機会を設けたい。 ・コラボスクールとの協力を得ながら姉妹都市であるフォートブラッグとの連携を図りたい。
おおつちラボ ３年生 ３単位	日常生活の中での「便利/不便」に感じることや「不思議」なことから、テーマを設定し、仮説を立て、調べ学習によって検証する過程を学んだ。「食品添加物」や「デザイナーベイビー」などの科学的事実・現象に対し、賛成・反対の意見を示しながらグループで討論を行い、科学的知見を用いて賛否の折衷案を探る体験を行った。 地域課題と SDGs に注目し、17 項目ある中で「海の豊かさ」「飢餓をゼロに」をテーマに大槌町の増養殖に関する取り組みについて現状把握を行った。町内のフィールドワーク（岩手大槌サーモン養殖視察）を通じて、取り組みの成果と課題について学んだ。また、廃棄される雑魚を活用した「骨格透明標本」の展示会場の視察を行い、様々な視点で SDGs に関わることができることを学んだ。	・大槌サーモンの取り組みを継続。 ・郷土財エリアを題材に、ビオトープづくりに携わることで自然保全につながる授業を組みたい。 ・フィールドワーク先として新山高原の風力発電施設、ジビエ関連の取り組み、製造業種の地元企業等を検討したい。

※課題と今後について　上記学校設定科目は教科書がなく、授業者が年間を通して試行錯誤を繰り返しながら探究的な学びを軸においた指導計画を策定するため教員の負担感が大きい。そのため、教科担任でチームを組んでの指導・教材開発を継続し、定期的に全体での検討を行い、科目の目標を確認しながら、より深い探究活動が行える科目にブラッシュアップを図る必要がある。また、受講生徒の特性に応じた柔軟なカリキュラム策定が必要となる。

（オ）学校横断型探究プロジェクトについて

小規模高校は地域資源と接続しやすいというメリットがある反面、自分と同様な興味関心を持つ生徒や教員と出会うことが難しいというデメリットがある。オンラインを活用することで学校の域を越え、同じような探究テーマで活動する生徒や、そのテーマに専門性を持つ大人と交流することが可能となる。そこで今年度は、マイプロジェクトを行っている小規模校４校が集い探究交流授業を行った。生徒の探究活動のジャンルごとにグループを作り、グループごとに発表・質疑を行った。次年度についても、小規模校等の連携を継続していきたい。

※連携校　北海道鹿追高等学校、静岡県立川根高等学校、私立中村高等学校

（２）管理機関による事業の実施体制や管理方法

ア　管理機関による事業の実施体制や管理方法について

管理機関独自の予算措置を行うとともに、事業をきめ細かく実施できるように教員の配置等の人的支援を行い、定期的に学校を訪問して事業の進捗を確認し、必要に応じ指導助言を行う。

イ　管理機関における主体的な取組について

（ア）管理機関（コンソーシアムを含む）における主体的な取組について

本事業予算から地域協働学習実施支援員１名の配置を行う。

（イ）事業終了後の自走を見据えた取組について

本事業により開発した研究内容について、事業終了後も充実発展させていくとともに、管理機関により、所管する高等学校へ広く周知していく。また、学校設定教科及び学校設定科目の実施について、適切な教育課程となるよう指導助言を行う。

（３）高等学校における事業の実施体制や管理方法について

ア　事業の対象

学校名	岩手県立大槌高等学校	校長名	継枝　斉
学科の種類	地域社会学科	新学科の名称	地域探究科
新学科の定員	80 名	設置年度	令和６年度

イ　事業の実施体制・管理方法

校長の下で、副校長とカリキュラム開発等専門家が事業の企画・運営の中心となり新学科設置に向けて準備を進める。なお、校内には、全職員からなる３つのワーキンググループ（カリキュラム、DX 等教育方法検討、周知・広報）（以下 WG）を設置している。WG で検討された内容は、校内の学科編成委員会で議論された後、職員会議で周知を図る。検討の進捗状況に関しては、岩手県教育委員会、運営指導委員会、コンソーシアム（魅力化構想）会議にそれぞれ報告し、指導・助言をいただいている。

ウ　各 WG の取組

（ア）カリキュラム WG

カリキュラム策定が役割である。７月までは新学科カリキュラムの完成に向けて検討を重ねた。７月からはデュアルシステム、社会教育の単位認定、セルフラーニングタイムの設定、DXWG メンバーと合同の個別最適な学びについての検討を行った。令和７年度実施のデュアルシステムについては、９・12 月に先進校視察を行った。当初インターンシップの期間を延ばす形を検討したが、企業の受け入れ体制、地域との協働という観点から別案の検討に入った。インターンシップ期間を年４回設け、３回は第１次から第３次産業までの就業体験、残り１回は地元企業でのインターンシップとする方向で検討を進めた。社会教育の単位認定については、「復興学（仮）」、「三陸海洋学（仮）」、「大槌地域づくり学（仮）」の３つの学校設定科目を設ける。それぞれ２単位を上限に生徒の学校外における体験的な活動やボランティア活動就業体験等に係る学修について、学校外における学修の単位認定制度を活用した単位認定の方策を検討した。

また、３年次にセルフラーニングタイムを設け、学びや活動の時間の自己プロデュースに関する検討を進めた。

令和５年度　ワーキンググループ(WG)所属一覧及び取組内容

◎WG長、○副WG長、□事務局

全体統括		校長　継枝　斉・副校長　竿代愛也		R4（取組内容）	R5（取組予定）	R6（取組予定）
1	カリキュラムWG	◎畠山　豪	○菊池竜太	・他校の特色あるカリキュラムの事例検討 ・育てたい人物像を踏まえつつ新カリキュラム策定に向けての議論 ・生徒ワークショップ開催 （魅力的な学校･カリキュラムにするには） ・デュアルシステム先進校聞き取り （軽井沢・和気閑谷高校） ・新カリキュラム検討 ・新学科名希望調査の実施	・新カリキュラムの完成（6月まで） ・新学科のスクールポリシー策定 ・個別最適な学びに関する研究（DXWGと共に7月から） ・デュアルシステムの検討 ・教科・探究学習のあり方検討（DXWGと共に7月から） ・社会教育科目の単位化検討 ・他校実施授業の単位認定方法の研究	・新カリキュラムの運用検討 ・個別最適な学びに関する研究（DXWGと共に） ・デュアルシステムの検討 ・教科・探究学習のあり方検討（DXWGと共に） ・社会教育科目の単位化検討 ・他校実施授業の単位認定方法の研究
		□菅野祐太	田中貴広			
		松田明日香	遠藤宗啓			
		渡部竜也	稲葉将大			
2	DX等教育方法検討WG	◎木村直温	○近藤健一	・ICT活用案の検討 ・デジタル教材の比較検討 ・新時代に対応した学び方の検討 ・教員の働き方の検討 ・ICTを活用した研究授業（5教科）	・リメディアル教材（紙・アプリ）の活用研究（ICT活用による学び直し） ・個別最適な学びに関する研究（カリキュラムWGと共に7月から） ・教科・探究学習のあり方検討（カリキュラムWGと共に7月から） ・DX研修会の実施（カリWGと連携） ・ICTを活用した教員の授業力向上 ・特別な配慮を要する生徒の支援の研究 ・他校実施授業の単位認定方法の研究	・リメディアル教材（紙・アプリ）の活用研究（ICT活用による学び直し） ・個別最適な学びに関する研究（カリキュラムWGと共に） ・教科・探究学習のあり方検討（カリキュラムWGと共に） ・DX研修会の実施（カリWGと連携） ・ICTを活用した教員の授業力向上 ・特別な配慮を要する生徒の支援の研究 ・他校実施授業の単位認定方法の研究
		□小野寺綾	佐々木知華			
		阿部成浩	皆川直輝			
3	周知・広報WG	◎菊池直美	○伊勢美和	・地域内中学生の進学状況分析 ・文化祭における探究学習取組展示 ・探究発表会における探究学習取組展示 ・探究発表会の地域への広報活動 （町内施設への個別訪問・ポスター掲示） ・noteを通した情報発信 ・新学科名希望調査の実施	・新学科の保護者・地域への効果的な周知・広報の検討 ・学校案内の作成（魅力化推進員と共に） ・学校説明会・1日体験入学の企画の見直し（教務課と共に） ・noteを活用した学校情報の発信 ・文化祭の企画（生徒課と共に） ・探究発表会等の企画（魅力化推進員と共に） ・地域協働についての研究協議会の企画	・新学科の保護者・地域への効果的な周知・広報の検討 ・学校案内の作成（魅力化推進員と共に） ・学校説明会・1日体験入学の企画の見直し（教務課と共に） ・noteを活用した学校情報の発信 ・文化祭の企画（生徒課と共に） ・探究発表会等の企画（魅力化推進員と共に） ・地域協働についての研究協議会の企画
		□星野七海	澤村勇一			
		相馬史弥	木村有里			
		村上百合子	吉岡信行			
		柴田優	星野眞理			

※その他　各グループによる先進校視察

（イ）DX 等教育方法検討 WG

今年度は、カリキュラム WG メンバーと合同で個別最適な学びを実現するための検討を進めた。前半は、デジタル教材の比較検討、数学の実験授業を進め、後半は令和６年度から実施の個別最適英語・数学の授業計画、具体的な授業展開の検討、教材選定、評価方法の検討を進めた。

なお、11 月には本校運営指導委員で、「メタ認知」や「動機づけ」などに関する領域がご専門の久坂哲也氏（岩手大学）をグループメンバーが訪問し、個別最適科目に関する意見交換を行った。さらに 12 月には、久坂哲也氏（岩手大学）を講師にお招きし、個別最適な学び、評価方法に関する教員研修をカリキュラム WG と合同で企画した。

（ウ）周知・広報 WG

設置目的は、高校改革における情報を周知し、地域を協働するパートナーへと転化させることである。６月から９月にかけては、地域内の中学校の高校説明会に参加し、中学生向けに新学科の説明を行った。また、昨年に引き続き地域との協働機会や生徒の学びを保護者や地域住民に知らせるため、10 月の新学科説明会、文化祭、11 月のこれからの大槌高校を考える会、２月の探究発表会における取組展示を行った。その他、高校の取組が広く見えるようにホームページや note、広報おおつちを活用しての情報発信を積極的に行った。

広報活動は複数チャンネルを使って行ってはいるものの、新学科の取組が中学生やその保護者、地域に幅広く浸透しているとは言えず、今後も新学科が魅力的なものと感じられるような効果的な周知の方法を検討していく必要がある。

（４）運営指導委員会の体制および取組

ア　運営指導員会の体制

氏　名	所　属・役職等	備　考
牧　野　　篤	東京大学教育学部 教授	教育専門家
佐々木　修　一	富士大学経済学部 教授	学識経験者
福　田　秀　樹	東京大学大気海洋研究所大槌沿岸センター 准教授	学識経験者
久　坂　哲　也	岩手大学教育学部 准教授	教育専門家

イ　取組に対する指導・助言等の専門家による支援について

年間２回の運営指導委員会を開催。委員からは専門的な観点から活動計画や評価方法・検証等について助言をいただき、活動の改善を図った。また、三陸みらい探究における生徒の活動に対して指導・助言をいただいた。

（５）コンソーシアムの体制および取組

ア　コンソーシアム（魅力化構想）会議の体制

通番	機関名	機関の代表者名
1	大槌町町長	平　野　公　三
2	大槌高校校長	継　枝　　斉
3	大槌町議会議長	小　松　則　明
4	岩手県議会議員	岩　崎　友　一
5	大槌町議会総務教民常任委員会委員長	澤　山　美恵子 （芳　賀　　潤）
6	株式会社千田精密工業取締役会長	千　田　伏二夫
7	大槌町商工会会長	後　藤　力　三
8	一般社団法人おらが大槌夢広場代表理事	神　谷　未　生
9	大槌学園ＰＴＡ会長	兼　澤　幸　男
10	吉里吉里学園ＰＴＡ会長	芳　賀　　新
11	認定 NPO 法人カタリバ代表理事	今　村　久　美
12	大槌高校同窓会会長	佐々木　慶　一 （三　浦　文　雄）
13	大槌高校ＰＴＡ会長	小　林　隆　広
14	大槌町副町長	菊　池　　学 （北　田　竹　美）
15	大槌町教育委員会教育長	松　橋　文　明
16	大槌町教育委員	谷　藤　怜　美
17	大槌学園学園長	小　石　敦　子
18	吉里吉里学園中学部校長	浅　沼　寿　典
19	おおつちこども園園長	八木澤　弓美子
20	東京大学大気海洋研究所大槌沿岸センター教授	青　山　　潤

（　）内は年度途中に交替した前任の代表者名

イ　コンソーシアムにおける取組について

・年３回のコンソーシアム（魅力化構想）会議を開催。復興推進のリーダーとなる人材の育成を目指し、大槌町役場、高等教育機関、地域、産業界、NPO 等がコンソーシアムを構築し、協働して子どもたちの実践的な学びを支援しながら地域を活性化し、教育と地域復興の相乗効果を生み出すことで、新しい価値を創造できる人材を育成する。

・第２回コンソーシアム（魅力化構想）会議（令和５年 11 月 22 日）では、「これからの大槌高校を考える会」が開催され、100 名を超える、地域住民、生徒、保護者、教職員等が参加し、熟議が重ねられた。

・カリキュラムについてコンソーシアム（魅力化構想）会議において協議した。委員からの指導・助言を学科編成に反映した。

（６）コーディネーターの配置および活動内容

ア　カリキュラム開発等専門家について

菅野　祐太（町から認定 NPO 法人カタリバへの業務委託）　週４日常駐

活動日程	活動内容
毎月１回	・大槌高等学校の職員会議等に出席 ・魅力化の取組の進捗や運営指導委員会やコンソーシアム等開催された会議の内容を共有
不定期	・学科編成会議の協議進行 ・コンソーシアムによる魅力化に関する会議の企画・運営 ・ワーキンググループ事務局員として参加 ・町立学校コミュニティー・スクール等の会議に参加

イ　地域協働学習実施支援員について

小野寺　綾（本事業予算を使って認定 NPO 法人カタリバへの業務委託）　週４日常駐

星野　眞理（町から認定 NPO 法人カタリバへの業務委託）　週５日常駐

星野　七海（町から認定 NPO 法人カタリバへの業務委託）　週５日常駐

日程	内容
毎月１回	・大槌高等学校の職員会議等に出席 ・魅力化の取組について共有
毎週１回	・１・２年生の総合的な探究の時間の企画・運営 ・教員と打合せを行い、次回の授業方針を決定
年継続	・探究のルーブリック評価の構築
随時	活動の発表および紹介 ・地域の中学校を訪問し中学生に高校を紹介 ・来校者に探究活動について説明・紹介
令和５年４月～ 令和６年３月	・ICT 機器の活用・管理 ・学校横断型探究プロジェクトの企画・運営 ・ワーキンググループ事務局員として参加
令和５年４月～ 令和６年３月	地域との協働による探究的な学びの企画・運営 ・「マイプロジェクト・フィールドワーク」、「大槌発未来塾！」、「SIMulation おおつち町内フィールドワーク」、「マイプロジェクトアワード岩手県 summit」、「三陸みらい探究」等
令和５年 10 月・令和６年２月	・普通科改革支援事業の評価および集計・分析

ウ　カリキュラム開発等専門家、地域協働学習実施支援員の学校内における位置付け

カリキュラム開発等専門家１名、地域協働学習実施支援員３名が職員室に席を持ち常駐している。入学者選抜関連以外のすべての会議に参加するなど、教員とともに教育活動を行っている。各学年に最低１人ずつ配置し、学年の活動に参加するなど、生徒の状況を把握しながら活動している。

エ　全国募集活動について

本校では「はま留学」という名称で生徒を全国募集している。コーディネーターが中心となり、副校長、担当教員、大槌町教育員会、生活支援員からなるチームとして動いている。年４回の地域みらい留学フェスタに参加している他、年２回のオープンスクールを開催し、本校を留学生とその保護者に体験してもらう機会を設けている。なお、９月には東京で行われた地域みらい留学フェスタに対面で参加した。

日程	内容
6月 11 日(土) 12 日(日)	第１回地域みらい留学フェスタ
7月 22 日(土) 23 日(日)	第２回地域みらい留学フェスタ
8月 19 日(土) 20 日(日)	第１回はま留学オープンスクール （参加者：各県の中学生と保護者　９組）
8月 26 日(土)	第３回地域みらい留学フェスタ
9月２日(土) ３日(日)	第４回地域みらい留学フェスタ
9月 23 日(土)	地域みらい留学フェスタ（ＮＹＣ：対面）
9月 30 日(土)	第２回はま留学オープンスクール （参加者：各県の中学生と保護者　１組）

（７）新学科の設置及び設置に向けた検討状況・関係者への説明の実施状況

ア　新学科設置の検討理由

（ア）多様な能力・適性、興味関心を持って入学した生徒に応じた学びを実現するため。

（イ）Society5.0 における現代的な諸課題や DX、人生 100 年時代の到来など急速な変化に対応できる生徒を育てるために、教科横断的な学びや新たな学問領域に即した特色・魅力ある学びに重点的に取り組むため。

（ウ）地域社会に暮らす人々と協働し探究活動を進めることで、生徒が暮らす地域の魅力や課題を明確化し、今後の地域社会にとって何が必要かを考える学びの場とするため。

（エ）東日本大震災以降、人口減少の続く当該地域において、ソフト面の復興を果たすために、高等学校が地域を支える人材の育成と地域における社会教育の拠点施設としての役割を担う必要があるため。

イ　新学科設置に向けた検討内容

（ア）普通科２学級のすべてを地域探究科とする。

（イ）地域を題材とした探究の実践と充実に向けて、総合的な探究の時間「三陸みらい探究」、５教科において探究的な学びを教科横断的に実践する学校設定科目「地域みらい学」を進学・就職希望にかかわらず学ぶことができる教育課程の開発を行っている。

（ウ）新教育課程編成にあたっては、探究科目の充実、科目選択の自由度向上、社会教育の単位化、キャリア学習の充実（デュアルシステム導入）、復習科目の充実（リメディアル）、授業のオンライン履修の一部認可を盛り込んだ形を検討している。

（エ）コンソーシアムと職員室に常駐するコーディネーターの配置を構築しており、大槌町役

場をはじめ地域の企業や東京大学大気海洋研究所等の研究機関、地域の小中学校や教育に関わるNPOなどと連携や協働体制を強化している。

ウ　新学科設置による期待される効果

（ア）カリキュラムを見直すことで、多様な能力・適性、興味関心を持って入学した生徒が学習に対して意欲を持ち、生涯を通して学び続ける力の育成を図ることができる。

（イ）教科横断的な学びや新たな学問領域に即した最先端の特色・魅力ある学びに重点的に取り組むことで、予測不能な社会においてもありたい未来を創造できる人材を育成することができる。

（ウ）地域社会に暮らす人々と協働し、地域社会の発展に関わることで、自らの人生を切り開く力を身に付けることができる。

（エ）自立と社会参画に向けた生徒の学習ニーズに応える多様で柔軟な仕組みを整備することで、生徒が将来にわたって社会の持続的な発展に寄与できるようになるために必要な資質・能力の育成を図ることができる。

（オ）「学科」に位置付けることで地域を中心としたより深い探究的な学びの場であることを学校内外に周知するとともに、中学段階にある生徒の高校選択の材料とすることができる。

エ　学科編成に関する検討

検討場面・日程	検討内容
普通科改革に関する職員研修 （令和４年５月16日）	普通科改革支援事業採択（４月15日）、計画書提出（５月13日）を受けて、小学科普通科２学級のうち、１学級を地域社会学科（仮）、１学級を普通科とすることで検討を進める方向であることを確認・周知する。
７月定例職員会議 （令和４年７月26日）	全教員からなる３つのWG（カリキュラム、DX等教育方法検討、周知・広報）を立ち上げ、検討に入ることを確認・周知する。
生徒全校ワークショップ(２回) ・ヒアリング・アンケート(１回) （令和４年10月）	生徒アンケートから、50%以上が「希望に合わせた科目選択制」を望み、特に文理コース（進学希望）所属生徒が探究的な科目を選択してより地域の学びを深めたいという希望が多いことを確認する。その後、教員・保護者の声を集めながらカリキュラムWGで今後の方向性についての検討を進める。
第２回コンソーシアム会議 （令和４年12月23日）	委員から小学科普通科においても学校設定科目で実施しているより深い探究的な学びができるかの質問があり、対応できるような課程を検討中と回答。カリキュラムWG中心に小学科を地域社会学科（仮）に一本化する検討を本格的に進める。
第４回学科編成委員会 （令和５年１月26日）	小学科普通科を設置した場合、科目選択の余地があまりないため、小学科普通科２学級をともに地域社会学科（仮）とし、進学・就職に関係なく科目選択の自由度を高める方向で進めることを確認する。教育課程編成については、カリキュラムWGを中心に進める。
第３回コンソーシアム会議 （令和５年３月20日）	令和４年度の事業報告を行った。新学科名について名称候補（教職員・生徒・保護者アンケートより選定）４案を提示する。委員案については、後日提出してもらい選定は学校に一任となった。

オ　学科定員の変更

生徒ワークショップ、保護者、教員の科目選択を柔軟にしたカリキュラム編成を望む声に応え学科定員の変更を申請した。なお、申請時は、小学科地域社会学科（仮）１学級（40名）、

小学科普通科１学級（40 名）を設置予定であったが、小学科普通科を設置した場合、科目選択の余地があまりないため、２学級をともに小学科地域社会学科（仮）（80 名）とし、進路（進学・就職）に関係なく科目選択の自由度を高める学科編成を目指すこととした。

カ　新学科名称に関する検討とスケジュール

令和５年４月に新学科名候補６案（優先順位付けなし）を提出し、県教育委員会で選定、７月に県議会に上程され同日報道発表、10 月に県議会で条例改正し正式決定となった。

（ア）教職員・生徒・保護者アンケート（令和５年３月実施）

（イ）コンソーシアム会議（令和５年３月 20 日）において名称候補４案提示

名称案	メリット・デメリット整理
探究科	○国の目指す教育を表し、山形東高校（山形の進学校）等探究学科の設置が増えてきている ×探究という言葉が学びの手段にとどまり、子どもたちにどのような未来があるのかが明確でない
学究科	○高校において基礎学力をつけたり、進路につながる「学」びを実現することと探「究」的な学びの双方を実現する学科であることが一言で伝わる ×学究という言葉に馴染みがなく、一言で理解されない可能性がある
地域みらい科	○学校設定科目の名称として使用されており、大槌高校の特徴を端的に表している。 ×地域という言葉が人文・社会科学（文系）を想起する言葉であり、自然科学系（理系）生徒から敬遠される
きぼう創生科	○学んだ先にどのようなものを創り出したいのかというところまで言及があり、学ぶことが限定されない ×曖昧な言葉で政治や宗教的なものを連想させる可能性がある。

（ウ）岩手県教育委員会提出（令和５年４月５日）に名称候補６案を提出、その後選定。

※コンソーシアム会議委員から提出された案も含め名称候補６案を学校案として提出

No	学科名候補案	名称理由
1	探究科	本校の学びの軸である探究活動をそのまま学科名に落とし込んだ。本校の特色であり、軸となる「探究」こそが、コンセプトであり、学びである。探究をとおして、これからの時代を生きていくための資質･能力を培っていくことへの期待を込めている。
2	学究科	「学」は学びの学、学問の学、進学の学、「究」は探究の究、研究の究。この漢字２文字を標榜することで、従来の学びと本校の特色である探究で学ぶことができる学科であることへの願いが込められている。コンセプトは、「学問で、探究で、資質・能力（大槌（ハンマー））を身に付ける」である。特にも基礎学力の充実や進学を希望する保護者に対して「学」を組み込むことの意義は大きい。
3	地域みらい科	学校設定教科の名称をそのまま学科名にした。そのことにより、新学科の学びがイメージしやすい。コンセプトは「地域をフィールドに自分の学びを自分でつくる」。地域の、そして自分の未来を創っていく力（大槌（ハンマー））を育むことへの期待を込めている。
4	きぼう創生科	どんな場面でも希望を見出し、自分らしく前を向いて生きていく力を育てる学科。先の読めない時代を生きていくには、何より「きぼう」が必要であり、その「きぼう」はこの学科で身に付けた資質・能力により新たに創り出されていくことへの期待を込めている。

5	地域探究科	自分たちの暮らす地域をテーマとした学びを深め、地域と協働しながら地域社会の課題解決に向けた人材育成をめざす。そして、これからの時代を生きていくために必要な資質・能力を身に付けていくことへの願いを込めている。
6	未来探究科	未来は決して優しい「みらい」とは限らなくて、厳しい現実が待ち受けているかもしれない。漢字を用いたのは、そんな大海のような、先の読めない未来を表現するため。そのような未来に対して、自分や地域の未来につながる力、困難を乗り越える力を探究し、自分の未来を切り拓くことへの願いが込められている。コンセプトは「探究活動をとおして先の読めない時代を乗り越える力を身に付ける」である。

（オ）県議会に上程（令和５年７月５日）、同日新学科名「地域探究科」（仮称）の報道発表

（カ）新学科名の選定理由（岩手県教育委員会資料より）

No	新学科名(仮称)	選定理由
1	地域探究科	地域社会が有する魅力や課題等をテーマとした探究的な学びをとおして、地域と協働しながら主体的に課題解決に向けて取り組む人材の育成や、これからの変化の激しい時代を生きていくために必要な資質・能力等を育成するという大槌高校が目指す学びを端的に表した名称である。

（キ）県議会にて承認（令和５年 10 月 26 日条例公布）、新学科名「地域探究科」が認められる

キ　大槌高校新学科設置に関する地域説明会

地域内中学校等教育関係者 14 名、地域住民（中学生及び中学生保護者含む）17 名の合計 31 名が参加。活発な質疑応答が行われた。

1　目的　令和６年度に大槌高校へ新学科「地域探究科（仮称）」を設置するに当たり、地域の方々に学科改編の趣旨や新学科の学びの内容等を説明することにより、周知を図ることを目的とする。

2　主催　岩手県教育委員会、岩手県立大槌高等学校　　共催　大槌町教育委員会

3　開催日時　令和５年 10 月２日（月）18:00～19:00

4　開催場所　大槌町文化交流センター（おしゃっち）多目的ホール

5　参加者　　地域住民等、誰でも参加できる。ただし、事前申込とする。

6　説明会の内容

(1) 普通科改革の概要、経緯等について

(2) 大槌高校の学科改編の概要や新学科における学びの内容等について

(3) 質疑

(4) その他

ク　関係者への説明の実施

管理機関の岩手県教育委員会へは訪問指導の際、運営指導委員会及びコンソーシアム会議、学校評議員会へは、会議の際に進捗状況を報告している。なお、年度末の会議の際は、令和５年度の事業報告及び令和６年度の事業計画の報告を行った。

（８）管理機関における事業全体の成果検証、評価

本事業申請時に提出した目標設定シートに準じて進捗状況の成果を検証する（高等学校）。

ア　卒業時に生徒が習得すべき具体的能力を測るものとして設定した成果目標

下記指標に対する４件法によるアンケートの肯定的回答の割合

三菱 UFJ リサーチによる高校魅力化評価システムの調査結果から抽出したもの。

番	設問	R3 入学生		R4 入学生		R5 入学生
		R3 12 月	R5 7 月	R4 9 月	R5 7 月	R5 7 月
1	**課題の発見と解決に必要な知識および技能**	57.6%	60.0%	62.7%	67.8%	54.2%
	―自主的に調べ物や取材を行う	57.6%	58.2%	60.5%	68.2%	55.0%
	―現状分析し、目的や課題をあきらかにすることができる	57.6%	61.8%	64.9%	67.3%	53.3%
2	**探究の意義・価値理解、地域社会との関わり合い**	50.0%	50.0%	50.9%	50.0%	54.3%
	―地域をよりよくするため、地域の問題に関わりたい	50.8%	56.4%	47.4%	45.5%	58.5%
	―誰かに言われなくても自分から勉強する	49.2%	43.6%	54.4%	54.5%	50.0%
3	**課題発見・解決への指向**	66.1%	59.1%	57.0%	59.1%	62.5%
	―情報を、勉強したことと関連づけて理解できる	64.4%	65.5%	57.9%	63.6%	70.0%
	―地域や社会での問題や出来事に関心がある	67.8%	52.7%	56.1%	54.5%	55.0%
4	**主体性・協働性**	59.3%	57.3%	53.5%	57.3%	60.8%
	―忍耐強く物事に取り組むことができる	55.9%	65.5%	54.4%	56.4%	58.3%
	―自分の考えをはっきりと相手に伝えることができる	62.7%	49.1%	52.6%	58.2%	63.3%
5	**価値創造への提案と次へつながる学び**	50.9%	47.3%	45.6%	52.8	50.0%
	―国や地域の担い手として、政策決定に関わりたい	37.3%	34.5%	31.6%	36.4%	31.7%
	―学習を通じて、自分がしたいことが増えている	64.4%	60.0%	59.6%	69.1%	68.3%

※R3・4 入学生ともに課題解決に向けた知識・技能において向上が見られる。R5 入学生は課題発見・解決への指向、主体性・協働性は高い数値となっているが、課題解決に向けた知識・技能が低い数値となっている。調査時期が７月に早まったことも低評価につながったと考えられる。

イ　目標設定シートについて（別添）

ウ　今後の自走に向けた方向性について（管理機関評価）

	大槌高校	岩手県平均
社会性に関わる学習活動	48.8%	47.4%
社会性に関わる学習環境	65.4%	63.0%
社会性に関わる行動	32.4%	27.7%
探究性に関わる学習活動	68.2%	64.0%

当該校では、地域との連携・協働、コーディネーターの配置、探究的な学びの充実及び目指す人材育成のためのカリキュラムマネジメントなど、県内の高校のモデルとなる取組を推進しており、大槌高校の普通科改革支援事業における地域協働の取組を高く評価している。

高校魅力化評価システムの調査結果を岩手県全体のデータと比較すると、探究性・社会性に関わる項目についての大槌高校生徒の肯定的な回答の割合が、県平均を上回っている。

このことから、魅力的な学びの環境を地域と共に創るという事業構想の具現化が着実に進んでいると評価することができる。

また、令和５年 11 月にはコンソーシアム会議内で、「これからの大槌高校を考える会」が開催され、地域、生徒、保護者、学校の職員等が参加し、熟議が重ねられた。学校とコンソーシアムが協働しながら組織的に取り組んでいることは、県内のモデルケースになると考えている。

国の指定終了後も大槌町との協力体制を継続強化しながら、個別最適な学びと協働的な学びの効果的実現に向けて準備を進めていく。

（９）管理機関による支援体制（予算・人員配置等）

当該校は学校独自の学校設定教科・科目を設け、個別最適な学びと協働的な学びの充実をめざしている。これらの学びの実現のために、継続的な教員加配措置に係る支援と専門的知見を有するコーディネーターの配置について、引き続き検討していきたい。

(10) 成果普及のための取組

ア　他校交流

年間を通して多くの学校と探究活動、教育課程、地域連携、全国募集、学校運営等について意見交換をする機会が得られ、本校の教育活動の参考にすることができた。

他校交流	実施日程
福島県立あさか開成高等学校来訪（探究学習・進路指導に関する意見交換） 来訪者：教諭２名	6 月 27 日(火)
大阪府立桜塚高等学校訪問（交流事業に関する意見交換） 訪問者：教員２名、コーディネーター１名	9 月 7 日(木)
大阪府立箕面東高等学校訪問（デュアルシステム・科目選択に関する意見交換） 訪問者：校長１名、教員１名、コーディネーター１名、コラボスクールスタッフ１名	9 月 7 日(木)
大阪府立豊中高等学校能勢分校訪問（探究学習・里山留学に関する意見交換） 訪問者：校長１名、教員１名、コーディネーター１名、コラボスクールスタッフ１名	9 月 8 日(金)
京都市立開健高等学校訪問（指定校発表会参加を兼ねる、探究授業見学） 訪問者：副校長１名	9 月 22 日(金)
群馬県教育委員会、群馬県立嬬恋高等学校来訪（探究学習・全国募集に関する意見交換） 来訪者：県教委２名、教諭２名、役場職員１名	10 月 4 日(水) 10 月 5 日(木)
宮城県角田高等学校来訪（探究学習に関する意見交換） 来訪者：教諭４名	11 月 7 日(火)
福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校訪問（CDN 研修参加を兼ねる、探究授業見学） 訪問者：教員１名、コーディネーター研修１名	11 月 21 日(火)
宮城県石巻商業高等学校来訪（探究学習に関する意見交換） 来訪者：教諭３名	12 月 12 日(火)
岩手県立盛岡商業高等学校訪問（インターンシップ、商品開発・販売に関する意見交換） 訪問者：教員２名	12 月 12 日(火)
岩手県立盛岡農業高等学校訪問（インターンシップ、商品開発・販売に関する意見交換） 訪問者：教員２名	12 月 12 日(火)

北海道大樹高等学校来訪（探究学習・学校設定科目・全国募集に関する意見交換） 来訪者：校長１名、教諭２名	12 月 18 日(月)
青森県立百石高等学校来訪（探究学習に関する意見交換） 来訪者：教諭２名(13 日)、教諭１名、臨時講師１名(22 日)	2 月 13 日(火) 2 月 22 日(木)

イ　活動の内容や状況について学校ホームページや note で公開している。また、大槌町の広報誌に毎月活動の様子を掲載し町内へ広報している。

ウ　管理機関が実施する各種協議会等において本校の取組を周知し、地域と協働した教育活動による学校の特色化・魅力化を推進している。

エ　周知・広報 WG により町内各所に各探究発表会の案内、生徒の研究発表成果物の展示を行っている。

オ　毎年、地域協働についての研究協議会を開催し事業の成果を発表している。今年度は昨年度に引き続き対面での実施となり町外から 60 名を超える参加があった。

カ　令和６年度については、より詳細な新学科の内容を中学校、周辺住民に伝える広報活動を周知・広報 WG を中心に進めて行きたい。

(11) 国の指定終了後の取組継続のための仕組みづくりに関する取組

事業３年目に新学科を設置するが、事業２年目までに設置に向けた取組を進めるとともに、教職員に過度な負担とならないよう業務が円滑に進む体制を整備した。３年目は設置した新学科において特色ある教育活動を実践する。個別最適な学びと協働的な学びを一体的に行うためには個に応じた柔軟なカリキュラムが必要である。そのため令和６年度の実施状況を踏まえて、学校設定教科・科目や探究的な活動の評価し、必要に応じて再構築等を検討していく。

令和７年度以降は大槌町との協力体制を継続・強化しながら、管理機関として、当該校が本県の最先端校として常に新しい学びを実践していく体制を維持し自走できるよう支援していく。

事業終了後も大槌町行政との強い連携を維持するために、教育課程と町の計画である教育大綱・総合計画との連動を図る。そのため、学校運営協議会等で収集した地域のニーズを必要に応じて教育課程に反映させるとともに、学校広報を積極的に行い、高校が地域にとって果たす役割を周知していく。

また、事業終了後もコーディネーターの配置等、事業計画を推進する上での経費の継続的な支援を検討していきたい。

【担当者】

担当課	学校教育室　高校教育担当	ＴＥＬ	019-629-6140
氏　名	砂沢　剛	ＦＡＸ	019-629-6144
職　名	主任指導主事	e-mail	t-sunasawa@pref.iwate.jp

Ⅱ　研究開発の内容（詳細）

1　会議関係

（1）魅力化構想会議・コンソーシアム会議

大槌高校では、高校と町行政、町議会、各種学校の教育機関及び企業、研究機関との連携を拡充するとともに、生徒の主体的な学びへとつながる様々な教育機会の提供の充実を図り、県が設置するコンソーシアム会議と町が主催する大槌高校魅力化構想会議を設置している。

ア　魅力化構想会議・コンソーシアム会議 委員 ※（　）内は年度途中に交替した前任の代表者名

No	氏名	所属・役職
1	平　野　公　三	大槌町長
2	青　山　　潤	東京大学大気海洋研究所大槌沿岸センター 教授
3	小　松　則　明	大槌町議会 議長
4	継　枝　　斉	大槌高等学校 校長
5	岩　崎　友　一	岩手県議会議員
6	澤　山　美恵子	大槌町議会 総務教民常任委員会委員長　（芳　賀　　潤）
7	後　藤　力　三	大槌商工会 会長
8	今　村　久　美	認定NPO法人カタリバ 代表理事
9	千　田　伏二夫	株式会社千田精密工業 取締役会長
10	神　谷　未　生	一般社団法人おらが大槌夢広場 代表理事
11	兼　澤　幸　男	大槌学園 PTA会長
12	芳　賀　　新	吉里吉里学園 PTA会長
13	佐々木　慶　一	大槌高等学校 同窓会会長　（三　浦　文　雄）
14	小　林　隆　広	大槌高等学校 PTA会長
15	菊　池　　学	大槌町副町長　（北　田　竹　美）
16	松　橋　文　明	大槌町教育委員会 教育長
17	小　石　敦　子	大槌学園 学園長
18	松　村　厳　寿	吉里吉里学園中学部 校長
19	谷　藤　怜　美	大槌町教育委員
20	八木澤　弓美子	おおつちこども園 園長

イ　魅力化構想会議・コンソーシアム会議 オブザーブ

No	氏名	所属・役職
1	中　村　智　和	岩手県教育委員会事務局 学校教育室高校教育課長
2	作　山　雄　一	大槌高等学校 事務長
3	畠　山　　豪	大槌高等学校 教務課長 カリキュラムWG長
4	澤　村　勇　一	大槌高等学校 生徒指導主事
5	田　中　貴　広	大槌高等学校 進路指導主事
6	菊　池　直　美	大槌高等学校 ２学年長 周知・広報WG長
7	木　村　直　温	大槌高等学校 DX等教育方法検討WG長
8	藤　原　　淳	大槌町 総務課長
9	太　田　和　浩	大槌町 企画財政課長
10	岡　本　克　美	大槌町 産業振興課長

ウ　魅力化構想会議・コンソーシアム会議 事務局

No	氏名	所属・役職
1	砂　沢　　剛	岩手県教育委員会事務局 学校教育室高校教育担当主任指導主事
2	竿　代　愛　也	大槌高等学校 副校長
3	吉　田　　智	大槌町教育委員会事務局 学務課課長
4	平　野　正　晃	大槌町教育委員会事務局 学務課班長
5	菅　野　祐　太	大槌町教育委員会事務局 教育専門官

エ　第15回大槌高校魅力化構想会議兼
普通科改革支援事業令和５年度第１回コンソーシアム会議
日　　時：令和５年７月６日（木）14:30 ～16:30
場　　所：岩手県立大槌高等学校
内　　容：事業経過報告、普通科改革支援事業について（新学科名称（仮称）、教育課程案、入学者募集に関するスケジュール等）、全国留学事業について（今年度の県外入学者数、留学生発表、地元生発表）、
発言要旨：
［事務局より報告］

- 新学科名称が「地域探究科」になった。校内で教職員、生徒、保護者から出てきた４案と、魅力化構想会議委員からいただいた２案の、合計６案を県に提出しその後、岩手県教育委員会事務局及び県の教育委員での審議を経て、県議会の方に報告された。
- カリキュラム改革の方向性として、①探究的に学ぶ科目の充実、②科目選択の自由度向上、③社会教育の単位化、④キャリア教育の充実、⑤リメディアル科目（復習科目）、⑥授業のオンライン履修の一部認可、を軸に議論を進め、生徒が、自分の進路や興味関心に合わせた科目選択ができる限り可能になるような教育課程を組んだ。
- 今年度の高校説明会は、山田町の山田中学校、釜石市の甲子中学校にも直接お願いをし、例年よりも範囲を広げて実施する予定。また、１日体験入学では、例年行っているマイプロジェクト発表に加え、学校独自の科目である地域みらい学の体験授業も実施する予定。
- 今年度の県外留学生は、千葉県、埼玉県、兵庫県、京都府から男女５名が入学した。はま研究会をはじめとして、大槌高校ならではの学びに興味を持って入学をしてくれた。
- 次年度の県外留学生は６名の入学を目標として募集活動を行っている。８月のオープンスクールには、現時点で７名の応募がすでに来ている。
- 次年度に向けた下宿の整備状況は、民宿と個人宅下宿合わせて、現状４名までは受け入れ可能。引き続き、受け入れ先の確保に向けて動いていく。

［委員からの意見］

- 最初は定員割れなど数を埋めるための議論だったはま留学制度の議論が、生徒が変わっていく効果や地元生が受けた刺激による変化といった話になってきた。５年間かけて段階が変わってきた。続けていくことで効果が出るので、今後も町と学校が協力して進めていくことでより充実していくのではないか。
- はま留学事業は、地元の人たちが、受け入れてみようかなと思えるような体制や支援があれば、さらに長く続けていけるものになるのではないか。
- 地元出身の社員が多い企業としては、ぜひはま留学生に来ていただいて変化を起こして

ほしい。

- 地元の子ども達に良い影響があるはま留学生制度でなければならない。親元を離れ、良い刺激もあれば悪い刺激もあり、好ましくない方向に流れる可能性もあるが、留学生が悪い刺激に引きずられないよう、地域全体で支えながら、地元の子により良い影響を与えられるようになるといいのでは。
- 無理やり経験させるのではなく、子どもたちに主体的に取り組む場を与えることが、大槌に残りたい、帰ってきたいという気持ちを生み出すのではないか。
- 今後、統廃合で学校がなくなる地域も出てくることを考えると、岩手県内からも留学生を募集するような制度にしてみてはどうか。
- ３食を用意することは受け入れる側のハードルが高いため、大槌町内の仕出し屋さんにお弁当を運んでもらうようなシステムを確立できないか。
- スキューバダイビングの免許を取れる活動を課外学習として位置づけ、それをアピールポイントにしてみるのはどうか。
- 今後の継続を考えると、個人宅下宿を探し続けることはハードルが高いために、抜本的な方法の見直しが必要なのではないか。
- 町内に給食センターもあるので、高校生にもランチを提供するなどの方法も工夫次第でできるのではないか。
- 今後社会に出て自分から学ばなければいけない時に、国語力がハードルになると新しい知識を身に付けることも難しいので、ぜひ力を入れてほしい。
- 全国各地で、人との関わりができないまま大人になろうとしている子たちも多い中、大槌町に出会ったことでチャレンジできたり、そのような実感を得られたりする子が生まれていることは、日本の希望だと思う。
- 何か失敗をしたり、上手くいかなかったりする経験が、物事を暗記する経験以上に、AI時代に必要な力を育てるものになる。
- 魅力的な町を大槌高校と共につくっていくという方向で動くことや、卒業し町外に出た卒業生が仲間を連れて戻ってきたくなる魅力的な町をつくることが、我々に課せられた課題ではないか。

オ　第16回大槌高校魅力化構想会議兼
普通科改革支援事業令和５年度第２回コンソーシアム会議

日　　時：令和５年11月22日（水）18時30分～20時00分
場　　所：大槌町文化交流センター　おしゃっち
内　　容：大槌高校魅力化の経過報告、新学科に関する説明、地域協働学習に関するプレゼンテーション（教員代表１名、生徒代表２名）、地域・教員・生徒ワークショ

ップ「どうしたら地域が大槌高校生によってより良い学びの場になるのか？そのために私たちに何ができるのか？」

ワークショップで出た意見：

[生徒・地域・教員の三者が関わりたいと思う地域活動の内容と大事にしたいポイント]

- 大槌高校の文化祭イベントにバザーとして入りたい
- こども園主催のイベントに大槌高校を巻き込む
- 体験を主とした町にとっても有益な活動、海岸清掃、町のごみ拾い
- 地域の歴史を学ぶ、郷土愛を知る
- フェスティバルなどの大きなイベントに参加してみたい、大きなイベントをたくさんすると地域と関わることが増えるから
- 将来、高校生にしてほしいこと
- 高校生で天体観測、星に興味がある人
- 高校生が学びを得てほしい！→迷惑など考えずどんどん出てきてほしい
- 町内会行事に参加してほしい、運動会とか
- 地域の方々でやっているイベントなどに参加すること→参加しやすい
- 子供会など、夏休み、冬休み行事
- 学園との交流、勉強や読み聞かせ会
- 高校生が無理をしない程度の活動を！
- 町内活動募集の掲示板をつくる
- 地域と生徒のマッチング、意識共有の場が必要、大切
- 町内マルシェ
- 文化祭でおふるまい
- 町内運動会
- 漁協女性部サーモン料理、大槌サーモン、女性部のみなさんとの関わり
- 思ったことは口に出そう！
- やりたいことの具体的な整理のお手伝い
- 失敗しても温かくむかえます
- どんどん任していこう！
- もっと地域活動に誘った方がいい！
- 行動していこう
- やりたいこと動こう！
- スポーツ系のイベント
- みんなが参加できる活動
- 祭り、一緒に作る物、地域の人と学生など
- 成果が欲しい、例：新しい商品ができた、売り上げがのびた、話題になった
- イベント情報をもっと知らせる
- 地域との関わりを引き継いいでほしい、進学後も関わってほしい
- 進学後、外で学ぶ、地元の魅力に気付く、帰ってきて活動

・　イベントがテスト期間と重ならないようにしてほしい
・　自分のマイプロに関わるイベントの企画（あるなら参加）
・　大槌祭り
・　イベント
・　ボランティア
・　事前準備から
・　企画から当日まで
・　都会にはないまちの良いところを学ぶ機会を創出する
・　町を好きになる
・　海も山も学びたい
・　教室をオフィスに、高校生も会議に参加
・　バイトの許可
・　ふるさと科、まちの魅力として認識してくれる
・　人との交流の輪づくり（高校にて！）
・　高校生やいろんな人と一緒に料理作り（新しいアイディア）
・　まずきてくれることが大事！！なにをするかはまた別
・　好きなこと、楽しいこと
・　見てる方も楽しめること
・　高校生のイベント、地域のイベントそれぞれに参加してみる、好きなこと、楽しいこと

カ　第 17 回大槌高校魅力化構想会議兼
普通科改革支援事業令和５年度第３回コンソーシアム会議
日　　時：令和６年２月 27 日（火）10 時 30 分～12 時 00 分
場　　所：岩手県立大槌高等学校
内　　容：令和５年度事業報告（前回からの経過報告、今年度卒業生の進路状況、全国留学事業の令和６年度入学希望者状況と受け入れ体制等）、魅力化の今後の方向性・論点についての協議

（２）運営指導委員会

大槌高校では事業の効果を高めるため運営指導委員会を設置し、研究開発の実施状況について有識者から評価助言を頂いている。

ア　運営指導委員会委員

No	所属	氏　　名
1	東京大学教育学部 教授	牧　野　　篤
2	富士大学経済学部 教授	佐々木　修　一
3	東京大学大気海洋研究所大槌沿岸センター 准教授	福　田　秀　樹
4	岩手大学教育学部 准教授	久　坂　哲　也

イ　出席者：

No	所属	氏　　名
1	岩手県教育委員会事務局 学校教育室 高校教育課長	中　村　智　和
2	岩手県教育委員会事務局 学校教育室 主任指導主事	砂　沢　　剛
3	大槌高等学校 校長	継　枝　　斉
4	大槌高等学校 副校長	竿　代　愛　也
5	大槌高等学校 事務長	作　山　雄　一
6	大槌高等学校 教務主任・カリキュラム WG 長	畠　山　　豪
7	大槌高等学校 進路指導主事	田　中　貴　広
8	大槌高等学校 生徒指導主事	澤　村　勇　一
9	大槌高等学校 １学年主任	遠　藤　宗　啓
10	大槌高等学校 ２学年主任・周知広報 EG 長	菊　池　直　美
11	大槌高等学校 ３学年主任	近　藤　健　一
12	大槌高等学校 DX 等教育方法検討 WG 長	木　村　直　温
13	大槌町教育委員会学務課　課長	吉　田　　智
14	大槌町教育委員会学務課　班長	平　野　正　晃
15	大槌町教育委員会学務課　指導主事	小　原　道　宏
16	大槌高校カリキュラム開発等専門家	菅　野　祐　太
17	大槌高校魅力化推進員	小野寺　　綾
18	大槌高校魅力化推進員	星　野　眞　理
19	大槌高校魅力化推進員	星　野　七　海

ウ　令和５年度第１回運営指導委員会

日　　時：令和５年７月７日（金）15 時 00 分～17 時 00 分

場　　所：岩手県立大槌高等学校

内　　容：事業概要説明

令和５年度事業計画に関すること

ワーキンググループの推進状況に関すること

研究開発成果の分析・検証等に関すること

学校設定科目「地域みらい学」に関すること

発言要旨：

［総合的な探究の時間・探究的な学びに関すること］

・　探究的な学びに取り組む期間はどうしてもロングスパンになってしまうため、**自分たちの立ち位置はどこにあるのかということを時折振り返りができる場が必要**なのではないか。

・　探究活動の中で体験的に感得するのが苦手な生徒には、問いの立て方や、調べ学習の方法などを明示的に教えることも必要なのではないか。

［ワーキンググループの進捗状況に関すること］

・　カリキュラムを考える際に、焦点化できるところをつくった方が、先生方や子どもたちにとって分かりやすいものになるのではないか。
・　リメディアル教育は、基礎から積み上げていくことよりも、探究的な学びやキャリア学習を進めていく中で求められる力の必要性を感じることで、高いモチベーションを持てるようになるのではないか。
・　「主体的に学び続ける力」や「自己調整能力」を持っている子どもの具体的な姿を、これまで見てきた生徒の姿をもとに具現化していくと、指導と評価の一体化の実現がされやすくなるのではないか。
・　個別最適な学びの中で教え合いを導入することにより、子どもたちが高校でお互いに学び合うとか教え合う関係をつくっていく中で、お互いに高まっていく感覚を持てるようになるとより良いのではないか。
・　周知・広報に関して、入り口の中学生に対してアピールする情報と同時に、出口側で大学側からも注目されるような広報や、戦略を練られたらいいのではないか。

［評価・分析に関すること］

・　項目の信頼性や妥当性を検討するために、アンケートの得点と子どもの実際のパフォーマンスや基礎的な学力を紐づけながら、資質・能力の高まりと探究的な学びや基礎的な学びの力が高まりの関係を見ていったほうがいいのはないか。
・　探究発表会が終わった後の、先生方によるフォローが大切ではないか。また、あの場で生徒に接する町議会議員の方などにも、あらかじめ教育の理念やその場の目的や狙いなどをある程度説明し、生徒の達成感につながる発言をしてもらうと良いのではないか。
・　検定による数値の分析だけではなく、先生方の実感を加えてみてはどうか。実感ベースでの子どもたちの変化や、先生方が実践される中で感じていることを入れるといいのではないか。

［地域みらい学に関すること］

・　このタイミングで１度、取り組みの評価をしてみてはどうか。子ども自身が素直にこの教科をどう捉えているかを聞き取りながら改善できることを探し、改善を図っていく視点も大切ではないか。
・　教員が異動しても、地域と協働した探究的な学びを継続していくために、つながりの有無によらず、地域人材等を紹介できるバンクのようなものがあるといいのではないか。
・　地域の中で各教科に合わせた探究テーマを見つけることは難しいので、ある程度の枠に

はめたテーマ設定も大事ではないか。枠の中から面白い視点が生まれてくるといったことを期待してもいいのではないか。

エ　令和５年度第２回運営指導委員会

日　　時：令和６年３月 25 日（月）11 時 00 分～12 時 30 分
場　　所：岩手県立大槌高等学校
内　　容：令和５年度事業報告に関すること
　　ワーキンググループの推進状況に関すること
　　研究開発成果の分析・検証等に関すること
　　令和６年度事業計画に関すること

（３）普通科改革研究協議会

日　　時：令和６年２月 23 日（金・祝）15 時 30 分～16 時 30 分
場　　所：大槌町文化交流センター　おしゃっち
内　　容：有識者、教員、生徒が登壇するパネルディスカッション

［パネルディスカッションテーマ］

「大槌高校地域探究科の未来を語り合う」

～大槌高校はどのような人材を育てていくべきか？そのような人材は社会でなぜ必要なのか？ ～

［背景及び目的］

大槌高校と大槌町は、令和元年度から魅力ある学校づくりに向けて「大槌高校魅力化事業」を立ち上げ、様々な取り組みを進めてきた。そして令和６年度から新学科「地域探究科」が始動する。本会は大槌高校と地域が協働して、どのような人材を育てていくべきかを地域全体で考えていく機会としたい。

［登壇者］

・　寺脇 研氏　　（映画評論家・京都芸術大学客員教授）
・　細田 眞由美氏　（前さいたま市教育長・東京大学公共政策大学院講師・兵庫教育大学客員教授）
・　矢作 梨　　（大槌高校２年・埼玉県からのはま留学生）
・　兼澤 美海　　（大槌高校２年）
・　阿部 豊　　（大槌高校１年）
・　松田 明日香　　（大槌高校 教諭）　※進行役

研究協議会　登壇者プロフィール
寺脇 研氏（映画評論家・京都芸術大学客員教授）
　東京大学法学部卒業後、文部省に入省。初等中等教育局職業教育課長、広島県教育長、高等教育局医学教育課長、生涯学習局生涯学習振興課長、大臣官房審議官などを経て、2002年より文化庁文化部長。06年退官。『文部科学省 「三流官庁」の知られざる素顔』『「学ぶ力」を取り戻す　教育権から学習権へ』『危ない「道徳教科書」』など著書多数。

細田 眞由美氏（前さいたま市教育長・東京大学公共政策大学院講師・兵庫教育大学客員教授）
　埼玉県立高校英語教諭、埼玉県ならびにさいたま市教育委員会事務局勤務、さいたま市立大宮北高校校長を経て、2018年6月から23年6月までさいたま市教育委員会教育長を務める。国立教育政策研究所評議員、日本ユネスコ国内委委員

パネルディスカッション内容：

（ア）　パネラー自己紹介

（イ）　ディスカッションテーマ発表
「大槌高校はどのような人材を育てていくべきか？そのような人材は社会でなぜ必要なのか？」

（ウ）　パネルディスカッション
（大槌高校教諭　松田）
・ 大槌高校ではどのような人材が育つと思うか？まずは高校生から発言をお願いします。

（２年生　矢作さん）
・ 私は埼玉出身ではま留学制度を活用して大槌に来ている。埼玉と比べると、大槌は生徒の人数が少ない分、挑戦できるチャンスが巡ってきやすい。全員が主役になれる機会があり、自分のやりたいことを深められる地域だと思う。

（２年生　兼澤さん）
・ 私は中学校時代までは積極的な人間ではなかった。大槌高校では、地域に出る活動や町を飛び出す経験を多くさせてもらっていて、今年は復興研究会の活動で兵庫県やインドネシアのアチェに行かせてもらった。そうした人の前に立つ経験を通して、自分に自信がついた。大槌は、社会に出る前に自分に自信を持てる場所だと思う。

（１年生　阿部さん）
・ 私も人数が少ないという部分に共感した。人数が少ない分、やってみたいと思えばできる

ことが多い。でも、中にはやりたくない人もいる。そういう人がいてもいいと思うけど、やってみたい人とそうではない人の差を縮められるようなことも必要だと思う。

（講師　寺脇氏）

・ 大槌高校の生徒宣言の最初の項目に「私たちは、地元の未来を考え、地域活性化に取り組む生徒を目指す」という言葉があった。君たちのように、地域の中で学んだ生徒がこれからの時代には必要になってくる。これまでの日本は、物質中心、経済中心、「都会が勝ち組で田舎は無くなっていく」というような流れがあった。ただ、21 世紀の日本は大きな災害が続いている。今後は人口も減っていく流れを考えると、都会も地方もお互いに助け合っていかないといけない。地方は絶対に潰れてはいけない。地方の一次産業があるから、都会が支えられている。未来のためには足元の地域を考えることが大切で、地域コミュニティをよく分かっている人が、今後の日本というコミュニティを良くしてく存在になれる。今日の発表会を見て、生徒だけではなく、地域の大人も積極的に発言し、一緒に学んでいるのが印象的だった。「生涯学習に教師なし、生涯学習に生徒なし」と言った人がいたが、まさにそういう光景を見た。

（講師　細田氏）

・ 今日、高校３年生２人の「18 年間で身に付けた“大槌（ハンマー）”」の発表を聴いて、泣いてしまいそうになった。身に付けた力を、１人は「伝言ゲーム力」、もう１人は「四次元ポケット力」と名付けていた。ネーミングは異なるが、「誰かと誰かをつなぐ力」という点で意味は同じだった。「人とのつながり」や「コミュニティをつくる力」が大切であると、大槌で生まれ育った高校３年生が伝えてくれた。それこそが、大槌のこれまでの教育の賜物ではないか。高校生は、高校を卒業すると成人になる。18 歳までは守られてきた存在が、人と人とをつなぎ、社会をつくっていく存在になる。みなさんのような存在が、well-being な地域をつくっていくためには重要である。

（矢作）

・ 私は大槌に来てから２年間、人と人、町と人をつなぐという思いを大切に活動してきた。外から来た人が町に馴染むには、自分から町とつながっていくことが必要だと思う。卒業後は大槌を離れる予定ではあるが、一度持ったつながりは切れないと思っている。卒業後も、また戻ってきたいと思える町になっている。

（兼澤）

・ 私は生まれも育ちも大槌で、ずっとこの町で暮らしてきた。年々、地域のつながりは薄くなってきていると感じる。ご近所さん同士で顔を合わせる機会も減っていると思う。自分から町に出ていくという話で言うと、高校生自身が、自ら行動して町とつながっていくというのは少ないかもしれない。

（阿部）

・ 私は大槌の中でも「金沢」という山側の地域に住んでいる。人も少なくて、地域の人ほとんどが顔見知り。助け合っていかないといけない。

（細田）

・ 大槌高生のメンバーを見みると、県外から来た子もいるし、大槌出身者の中でも山側と町側の地域出身の子がいる。小さい学校の中にも多様性があるのが魅力的。はま留学で来た生徒は、この３年間が自身のアイデンティティ探す時間になっている。お互いの違いを理解して支え合っていく、いいケミストリーが生まれている学校だと感じた。

（矢作）

・ 大槌で出会った人の中には、私のように外から来た人も意外とたくさんいて、「私だけじゃないんだ」と安心した気持ちになった。留学した当初は、「大槌の人は小さい頃からの顔見知りが多く、外から来た人は馴染みにくいのではないか？」と思っていたけれど、私に対しても偏見を持たずに関わってくれる人が意外と多くて、そこがこの町のいいところだと思った。

（兼澤）

・ はま留学生だけではなく、マイプロジェクトで関わった地域おこし協力隊の人の中にも、町外から来た人がたくさんいた。町民の中にも多様性があることに気が付いた。

（阿部）

・ 私は人と関わることや地域の活動に参加していくことがあまり得意ではない。でも、将来は大槌町役場の職員になりたいと思っている。その夢を叶えるためにも、高校生のうちから地域活動にできるだけ参加しようと思って、外に出るようになった。そこで、はま留学生が大槌の地域活動に参加していることを初めて知った。そのことに驚いたし、同時に嬉しい気持ちにもなった。

（松田）

・ はま留学生の存在は、地元の生徒たちにもいい影響を与えている。２年生の生徒の中にも、矢作さんの活動に触発されて「私もマイプロジェクトを頑張りたい」と涙ながらに語ってくれた生徒もいた。

（細田）

・ 私は色んな自治体を見てきたが、町民がこんなに本気で教育に関わっている自治体はあまりないかもしれない。震災以降様々な困難があったと思うが、そういう経験をした町だからこそ、大人の本気と生徒の本気がぶつかり合う土壌ができているのだと感じた。

（阿部）

・ 昨年 11 月に開催された「これからの大槌高校を考える会」という、高校生と地域の方が一緒に語り合うイベントに参加した。そこで、地域の大人の本気の姿に触れた。その姿を見て大槌はいい町だなと思った。

（寺脇）

・ そんな阿部君だって、すぐに大人になる。今は大人にたくさん協力してもらっているだろうが、将来役場に勤めるようになったら、高校生からの依頼はきっと断れないでしょう。大人と子どものどちらが偉いというのはないから、一緒に学び合っていってほしい。また、都会が偉くて田舎が下ということも本来はない。昔はそうでもなかったのに、高度経済成長、バブル期を経ておかしくなってしまった。それがここ数年、「故郷を支える」「コミュニティを支える」という発想がだんだんと戻ってきている。大槌の人たちもそれを当たり前だと思ってやっている訳ではないだろうが、それはその通りで、特別なことではない。本来あるべき姿に戻ってきているということである。

エ　参加者からの質問・感想

（私立高校教員）

・ 私が勤務する学校でも、部活動等で様々な地域から生徒が集まっており、多様性もある。大事なのはその次の部分で、高校卒業後も地元に残りたい人は素晴らしいが、都会に出たい人もいて、それを否定することもできない。大槌高校の取り組みを知って、自分は大人として何ができるのか。学校だけでなく、市町村や県には何ができるのかということを考えさせられた。大槌で育った子が将来、町や県にどのように働きかけていくのかが楽しみであり、そういう意味で、大槌高校生は重要な役割を担っているのではないかと感じた。

（他市町村の住民）

・ 大槌にはここ数年、人が集まってきているように感じているが、うちの町にはなかなか来ない。どうしたら人が来るようになるのか。そのヒントを講師の方に伺いたい。

（寺脇）

・ 今日の話で何度も出てきたように、町自体が、経済の成長を求めるのではなく、本来の姿に戻っていくことが必要。これからの時代は、人口が更に減るし、災害も避けられない。コミュニティの力が必ず求められるようになる。そうした町をつくっていけばいいのではないか。

オ　講師よりまとめ・総括

（寺脇）

・ 今日はいい教育の形を見せてもらった。しかし残念ながら、大槌のような教育はまだマイナーな存在である。私は日本中にこんな学校が増えていくように、私の立場からできるこ

とに取り組んでいきたい。ご存知の方もいるでしょうが、マイプロジェクトは大槌が発祥の地であり、今日はそうした土壌の力を実感することができた。ディスカッションテーマである「大槌高校ではどのような人材が育つと思うか？また、そうした人材が、なぜ社会で必要なのか？」という問いは、日本全国で考えなければいけない。「大槌高校」の部分を「日本」や、それぞれの地域名を入れて考えてみてほしい。今日の場を通じて、日本の高校には何が必要なのかということが分かった。また、この場にこれだけ多くの高校生が参加しているのも素晴らしい。歴史的な１日となったのではないか。

（細田）

・ 学校は、民主主義の担い手を育てなければいけない。日本財団の調査で、他国と比べて日本の若者は、自分の行動で国や社会を変えられると思っていないというデータが出ており、社会参加、政治に興味がないと言われるが、自らの高校教員としての経験からすると、そんなことはないと思っている。今日、大槌の生徒たちを見ていても同じように感じた。問題は、子どもに内在するパッションを引き出す役目を、学校が果たせていないということである。社会課題についてどう思うのかをもっと問う必要があるし、若者のエネルギーを引き出し、増やしていくことが必要である。そして、そうした動きを日本中の学校に広げていきたい。みなさんからたくさんエネルギーをもらい、私自身も教育の原点を思い出すいい日となった。ありがとうございました。

2　ワーキンググループにおける検討について

（1） カリキュラム WG における検討について

ア　令和５年度のカリキュラム WG の検討計画について

令和４年度の検討において、①探究的に学ぶ科目の充実、②科目選択の自由度向上、③社会教育の単位化、④キャリア学習の充実、⑤リメディアル科目の充実、⑥授業のオンライン履修の一部認可の６つのテーマについて検討を進めることとなった。そのため、令和５年度には実際に教育課程に落とし込むとどのようになるのかを検討することと、またその実現に向けた検討項目を小 WG で検討をすることとした。

（図：当初設定した取り組み）

イ　検討内容について

今年度のカリキュラム WG の検討は、令和６年度に向けた教育課程編成と令和６・７年度に向けた検討テーマを深めることであった。検討テーマとしたのは以下の４つとし、それぞれ小 WG にて議論を行い、カリキュラム WG 案として、学科編成委員会で議論を行うという手続きをとった。以下の４つが小 WG で取り扱ったテーマである。

・社会教育科目運用検討　小 WG
・デュアルシステム　　小 WG
・ＳＬ時間検討　　小 WG
・個別最適科目検討　　※DXWG の議論に合流して行う

図：当初設定した取り組み

ウ　会議開催の流れ

会議名	日程	内容
第９回カリキュラム WG	6/14(水)	・教育課程編成（案）の提出 ・各教科の持ち時間の確認
第 10 回カリキュラム WG	9/1（金）	・小 WG での活動確認
第 11 回カリキュラム WG	10/18(水)	・デュアルシステムに関する検討 ※学校外における学修の単位認定制度の活用
第 12 回カリキュラム WG	11/7(火)	・社会教育科目の単位化について ※学校外における学修の単位認定制度の活用
第 13 回カリキュラム WG	1/22(月)	・セルフラーニングタイムの設定について

第９回には教育課程表（案）が示され、それぞれの立場から検討がなされた。また第 10 回はデュアルシステムに関すること、第 11 回は社会教育科目の単位化に関すること、第 12 回ではセルフラーニングタイムの設置に関する意見が出された。これ以降ではそれぞれの WG で検討項目と論点について概観する。

（ア）第９回カリキュラム WG

第９回には教育課程表（案）を示し、令和４年度に掲げていた６つのテーマのうち、①探究的に学ぶ科目の充実、②科目選択の自由度向上、③社会教育の単位化、④キャリア学習の充実、⑤リメディアル科目の充実の実現を図るべく議論を行った。

「①探究的に学ぶ科目の充実」を図るため、これまで主に就職や専門学校に進路選択を行う生徒しか選択できなかった学校設定科目を選択できるように編成した。

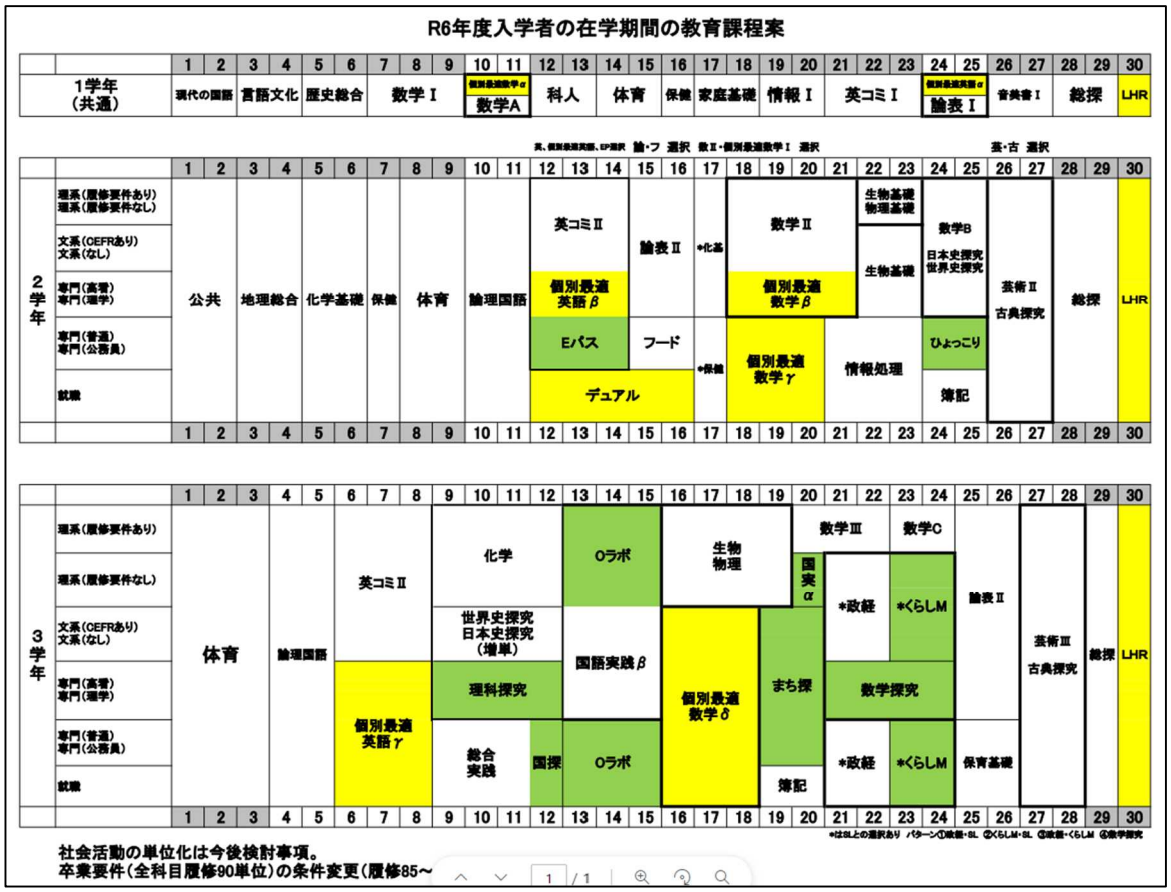
「②科目選択の自由度向上」については、主に２・３年生段階から生徒の興味関心に合わせて科目選択ができるような編成を行った。

「③社会教育の単位化」については、文部科学省の定める学校外における学修の単位認定制度を活用し、大槌高校で特に取り組まれている復興に関することと、東京大学大気海洋研究所大槌沿岸センターと連携した海洋に関する学校外活動や地域で行われるボランティア活動を単位化するという検討を行うこととした。

「④キャリア学習の充実」では、デュアルシステムを用い、インターンシップの充実を図るような授業として２年生に配置できないかという案を提示した。

「⑤リメディアル科目の充実」については、生徒のニーズも非常に強かったことから、個別最適科目として義務教育既習範囲まで戻って学習することを可能としながら、主体的に学びに向かう態度を育成するため、自己調整学習の手法を取り入れた科目を設定した。

図：第９回 WG で提出した教育課程案（※現在では変更がかかっている）



（イ）第 10 回カリキュラム WG

第 10 回では４つの小 WG の進捗状況の報告が行われた。

（ウ）第 11 回カリキュラム WG

第 11 回ではデュアルシステムに関することについて検討が行われた。以下が案の一部と WG 内であがった論点である。

〇設置目的

学校における職業教育と企業における学習の双方を通じて、生徒の「One Team（社会規範意識）」「コミュニケーション能力」「レジリエンス力」等の資質・能力を一層伸長するとともに勤労観・職業観を育むことを目的とする。

〇根拠制度

学校教育法施行規則第 98 条

第九十八条　校長は、教育上有益と認めるときは、当該校長の定めるところにより、生徒が行う次に掲げる学修を当該生徒の在学する高等学校における科目の履修とみなし、当該科目の単位を与えることができる。

一　大学、高等専門学校又は専修学校の高等課程若しくは専門課程における学修その他の教育施設等における学修で文部科学大臣が別に定めるもの

二　知識及び技能に関する審査で文部科学大臣が別に定めるものに係る学修
三　ボランティア活動その他の継続的に行われる活動（当該生徒の在学する高等学校の教育活動として行われるものを除く。）に係る学修で**文部科学大臣が別に定めるもの**

文部科学大臣が別に定めるもの

ウ　ボランティア活動その他の継続的に行われる活動(当該生徒の在学する高等学校の教育活動として行われるものを除く。)に係る学修で以下に掲げるもの(省令第 63 条の４第３号関係)
　(ア)ボランティア活動、就業体験その他これらに類する活動に係る学修で、高等学校教育に相当する水準を有すると校長が認めたもの(告示第３項第１号関係)
　(イ)スポーツ又は文化に関する分野における活動で顕著な成績をあげたものに係る学修で、高等学校教育に相当する水準を有すると校長が認めたもの(平成 10 年文部省告示第 41 号第３項第２号関係)

〇活動イメージ

前後期 20 日 (10 日×２回)	事前学習 （10 時間分）	事後学修 （20 時間）	職場の英語 （25 時間）	一般教養の習得 （20 時間）
企業実習	・マナー/礼法 ・心構え ・日誌等記入方法	・礼状作成 ・身に付けた資質能力 ・最終発表(準備)	・就職した際に活用する英語の知識・技能や英語を学ぶ意欲の情勢	・就職後に活用する一般教養の習得

〇WG 内の論点
・最終の報告の形はどのようにするのか
・企業はどのように集めるのか（継続的な協力はどのようにして得るのか）
・インターンシップ期間はどの程度にするのか
・インターンシップのそれぞれの活動はどのようなものとするのか
・現行インターンシップとの棲み分け

（エ）第 12 回カリキュラム WG
　第 12 回では社会教育科目の単位化に関することについて検討が行われた。以下が案の一部と WG 内であがった論点である。
〇設置目的
　生徒の能力・適性、興味・関心等の多様化の実態を踏まえ、学習の選択幅を拡大するとともに、自ら学ぶ意欲の向上により、生涯にわたる学習の基礎を培う観点から、生徒の学校外における体験的な活動や、自らの在り方・生き方を考えて努力した結果をこれまで以上に評価していくこととし、ボランティア活動就業体験等に係る学修について、単位として認定できるようにするため。

〇根拠制度（※上記同様）

〇設置科目

設定教科	学校設定科目	内容	上限単位数
地域みらい学	復興学（仮）	三陸の復興研究に資する学校外活動	2
	三陸海洋学（仮）	三陸の海洋研究に資する学校外活動	2
	大槌地域づくり学（仮）	学校存置地の市町村（近隣市町村含）における地域活性化に資する学校外活動	2

〇WG 内の論点

・単位認定の時期、方法
・社会教育科目の単位化の目的とは何か
・活動記録をどのように取るのか
・持続可能な運営体制
・引率等の考え方はどのようにするのか

（オ）第 13 回カリキュラム WG

第 13 回ではセルフラーニングタイムに関することについて検討が行われた。以下が案の一部と WG 内であがった論点である。

〇設置目的

自由に学修課題を設定する時間を確保することで、生徒が自ら課題を設定して取り組むことのできる力を育む 特に就職や専門学校への進路を希望する生徒が一律の課題に取り組むのではなく、進路準備のためにそれぞれの課題に取り組むことができるようにする。

〇設定概要

セルフラーニングタイムは単位化しないため、生徒は学校内に拘束しない。５・６時間目に設定し、セルフラーニングを選択した生徒は帰宅できることとする。また、科目趣旨として自由に学修できることを目的とするため、資格の勉強やマイプロはもちろんのこと、学校に関わらない学修をすることもできる時間とする。

〇WG 内の論点

・設定時間の名称
・どの学年で設定をするのか
・生徒の活動場所の確保

（カ）カリキュラム WG の次年度に向けて

各検討にあがっている論点について着実に検討を行い、令和７・８年度の教育課程の実装に向けて準備を進めていく。

（２）DX 等教育方法 WG における検討方法について

今年度は、令和６年度から始まる個別最適科目（英・数）の実現に向けた検討を進めた。前半は、デジタル教材の比較検討や数学の実験授業を行い、後半は、英語、数学における授業計画、具体的な授業展開の検討、教材選定、評価方法の検討をカリキュラム WG のメンバーと合同で進めた。

なお、11 月には本校運営指導委員で、「メタ認知」や「動機づけ」などに関する領域がご専門の久坂哲也氏（岩手大学）をグループメンバーが訪問し、個別最適科目に関する意見交換を行った。さらに 12 月には、同氏を講師にお招きし、個別最適な学びや評価方法に関する教員研修を実施した。

ア　教材の比較検討

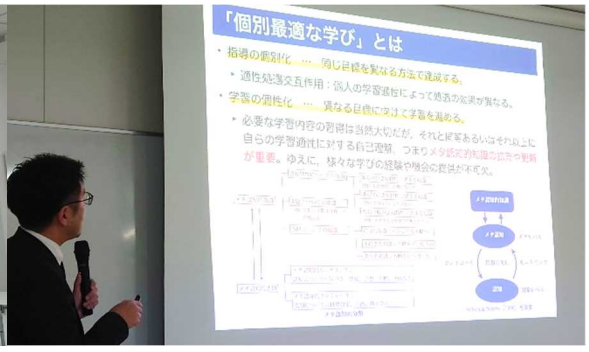
個別最適な学びの実現に向けて、デジタルを含めた教材の比較を行った。実際に 10 社程度にアポを取り、仮アカウント等を用意いただいて活用実験を行った。その後、各教材の特徴や、本校の生徒にとってのメリット・デメリットを整理しながら検討を進めた。

イ　数学の実験授業

１年生の数学Ａの授業内で、数学に苦手意識を持っている生徒を主な対象とした実験授業を行った。授業は、生徒が１回の授業の中で少しでも成長の実感を得ることや、生徒同士が協働して学び合うことを狙いとして実施した。

ウ　教員研修

「個別最適な学び」についての理解を深め、学校全体で目線を合わせることを目的として、教員研修を実施した。講師として、本校運営指導委員の久坂哲也氏（岩手大学）をお招きして、「自己調整学習」「メタ認知」「動機づけ」等の視点から、「個別最適な学び」の実現に向けて、これからの学校や教員に求められることについて講演をいただいた。



エ　今後に向けて

これらの取り組みで得た学びを踏まえて、現在は、WG 内の英語科、数学科の教員が中心となって、各科目の具体的な授業展開、教材、評価の在り方等の検討を進めている。「個別最適な学び」は、まだまだ開発途上の領域ではあるが、その理念や目的の実現に向けて開発を進めていきたい。

（３）周知・広報 WG における検討について

ア　検討テーマと目的

本 WG では、令和６年度から始まる地域探究科に関する情報を中学生や保護者、地域住民に正しく周知するための取組を実施した。

イ　近隣中学校への学校説明会の開催

例年、大槌町内をはじめとする近隣中学校にて学校説明会を行っていたが、今年度は学校数を拡大し、初参加となる山田中学校、甲子中学校を含めた８中学校に訪問した。

	期日	中学校
1	6月 26 日(月)	唐丹中学校
2	6月 30 日(金)	釜石東中学校
3	7月6日(木)	山田中学校
4	7月 11 日(火)	吉里吉里学園
5	7月 11 日(火)	大平中学校
6	7月 12 日(水)	大槌学園
7	7月 13 日(木)	甲子中学校
8	9月 20 日(水)	釜石中学校

ウ　地域に向けた新学科説明会の開催

地域住民向けの新学科説明会を県教育委員会主催にて 10 月 2 日（月）18:00～19:00 に開催。地域探究科設置の背景や、具体的な変更点について説明を行った。

エ　文化祭及び地域での探究活動展示

以下の日程で、探究活動の成果や高校の取組の様子を町内の施設等に展示し、地域住民に本校の特徴ある取組を周知した。生徒一人ひとりの顔が見える展示を行ったことで保護者や地域住民からの注目も高く、生徒の取組状況を見てもらうことができた。

［校内展示企画］

・　10 月 14 日（土）：文化祭当日に実施

［第１回展示企画］

・　９月 14 日（木 ）～9 月 25 日（月）：シーサイドタウンマスト１階センターコート

・　９月 25　日（月）～10 月５日（木）：大槌町文化交流センターおしゃっちエントランス

※２年生「ちょこっとマイプロ」の活動まとめポスターを展示

［第２回展示企画］

・　11 月９日（木 ）～11 月 20 日（月）：シーサイドタウンマスト１階センターコート

・　11 月 20　日（月）～11 月 22 日（水）：大槌町文化交流センターおしゃっちエントランス

※１年生「ちょこっとマイプロ」の活動まとめポスターを展示

［第３回展示企画］

・　２月 13 日（火 ）～2 月 19 日（月）：シーサイドタウンマスト１階センターコート

・　２月 19　日（月）～2 月 28 日（水）：大槌町文化交流センターおしゃっちエントランス

※３年生「18 年間で身に付けた“ 大槌(ハンマー) ”」の活動まとめポスターを展示

オ　note 等を活用した情報発信

今年度も継続して生徒の学校生活や学校行事の様子、メディア掲載のお知らせ等、合計 92 本(2 月 26 日現在)の記事を投稿した。また、今年は生徒会通信と題して生徒自身による発信も行った。

令和５年度ふるさとづくり大賞表彰式に参加しました

令和６年２月１６日（金）。東京の都市センターホテルにて、表彰式が開催されました。 大槌から日帰り…

岩手県立大槌高等学校
1日前

9

【復興研究会だよりNo.45】発行しました

復興研究会だよりNo.44（令和5年度第4号）では１２月から１月前半の活動について紹介しています。

岩手県立大槌高等学校
2週間前

9

アチェスタディツアー☆大槌町長・大槌高校校長へ報告会

1月23日に大槌町役場にて、町長と校長に向けてアチェスタディツアーに参加した４名の生徒が、報告会…

岩手県立大槌高等学校
3週間前

17

冬季生徒活動の様子（生徒会通信）

1年生シミュレーション(SIM)大槌フィールドワーク
1年生は総合的な探究の時間で、大槌町議会からい…

岩手県立大槌高等学校
1か月前

13

カ　地域に開かれた「探究発表会」の実施

２月 23 日（金・祝）に、大槌町文化交流センターおしゃっちにて、１・２年生の探究学習の成果発表会を実施した。町内から約 75 名、県内・県外から約 61 名の来場があり、多くの方に生徒の成長を直接感じてもらう機会となった。

【第１部】　１年生「大槌町の課題解決アイデア発表会」
【第２部】　２年生「マイプロジェクト活動成果発表会」
【第３部】　研究協議会 パネルディスカッション
テーマ：「大槌高校地域探究科の未来を語り合う」
登壇者：寺脇 研氏（映画評論家・京都芸術大学客員教授）
細田 眞由美氏（前さいたま市教育長・東京大学公共政策大学院講師
兵庫教育大学客員教授）
教員１名・生徒３名

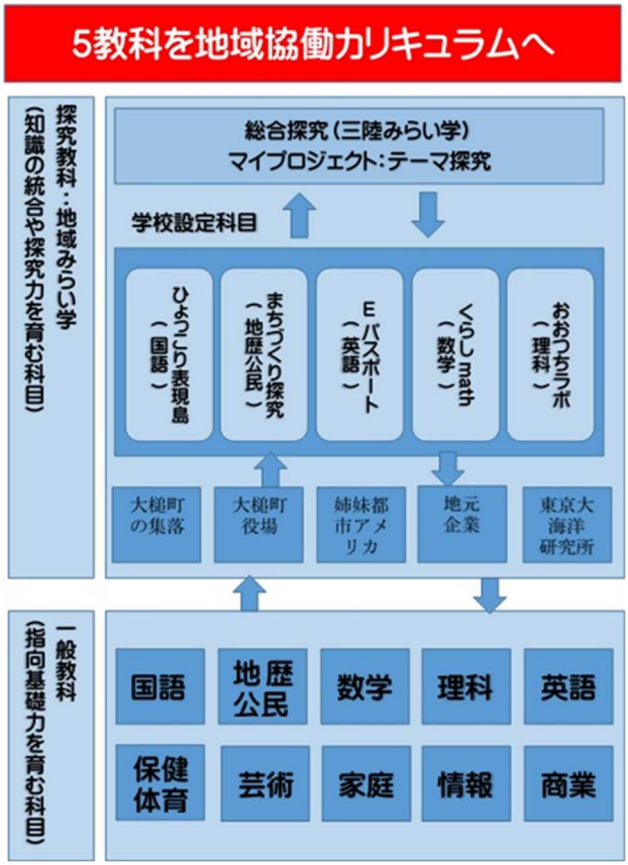
キ　今年度の成果・課題と次年度以降の方向性

・　令和６年度から新学科「地域探究科」が始まるにあたり、学科改変に関係する情報を学校案内や学校説明会、新学科説明会等で広く発信し、中学生や地域住民への理解を図った。特に今年度は新たに甲子中学校や山田中学校でも学校説明会を行い、より広く中学生に大槌高校の情報を伝えることができた。

・　昨年度から継続して行っている地域での展示企画は、昨年度より回数を増やし、全学年の生徒の活動の様子を町内へ発信することができた。来年度以降も継続していきたい。

３　学校設定教科・科目

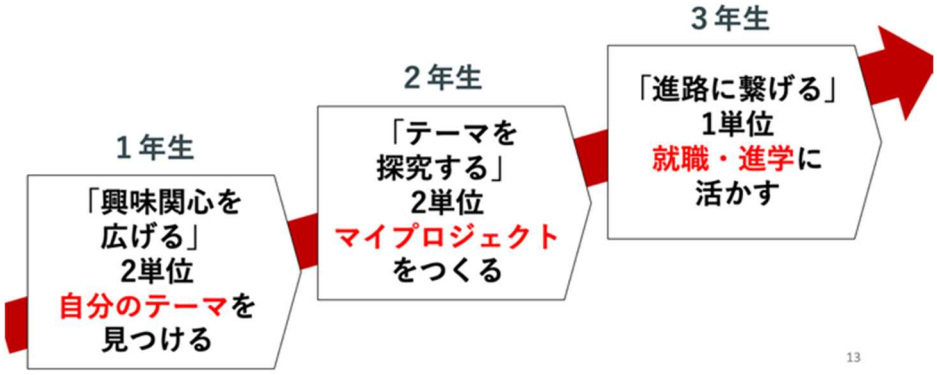
本校では、探究的な学びを深めるために学校設定科目「三陸みらい探究」（総合的な探究の時間）を設けている。さらに、生徒の資質・能力の育成のために各教科・科目と総合的な探究の時間を相互に関連させ、教科横断的な学習を実現することと、就職を中心とするコースの生徒に対して、これまで通りの授業でよいかという疑問点から、より探究的な学びを実践する学校設定教科「地域みらい学」を設定した。これらは、国語、地理歴史・公民、数学、理科、英語のそれぞれが探究的な学びを実践する、「ひょっこり表現島」、「まちづくり探究」、「くらしmath」、「おおつちラボ」、「Ｅパスポート」を設定し、地域協働カリキュラムとして令和３年度から実施を開始した。



◇各学校設定科目の実施状況◇

（１）三陸みらい探究（総合的な探究の時間）

三陸地域の復興を担うリーダーを育成することを目指し、３年間を通して身の回りや地域の課題を解決する力を身に付けることを目標としている。同科目では、大槌町というフィールドを題材に、地域課題の発見・解決に向けた活動を実施した。東日本大震災を経験した大槌町を題材にすることで、生徒は複雑多様な地域の事情や住民感情の揺れ等に触れることになる。そのような状況から、自分自身を見つめ、理想の姿を描き、それを実現するための実践を行った。この学びを通して、地域を創る側の視点を持って社会参画する意欲と力を涵養するとともに、今後ますます不確実性の高まる未来を生きていく力を育むことを目指した。大槌町においては、震災後の生活基盤の復旧は完成を迎えている。今後は高校生が社会の構成員として主体的な意志をもち、理想の姿に向かい行動を起こすことも復興の姿そのものとなる。「三陸みらい探究」では、そうした地域におけるロールモデルの基盤となる資質・能力の育成を目指した。３年間を見通した流れは以下の図の通りである。



１年生では「興味関心を広げる」をテーマに、自分紹介プレゼンテーションや町内外の大人による人生講話、大槌町の行政をシミュレーションするワークショップ活動等に取り組んだ。自分自身に目を向けるところから徐々に視点を社会へ広げ、町内・町外の具体的な取組を知り、課題解決を体験的に学ぶ機会を設定している。

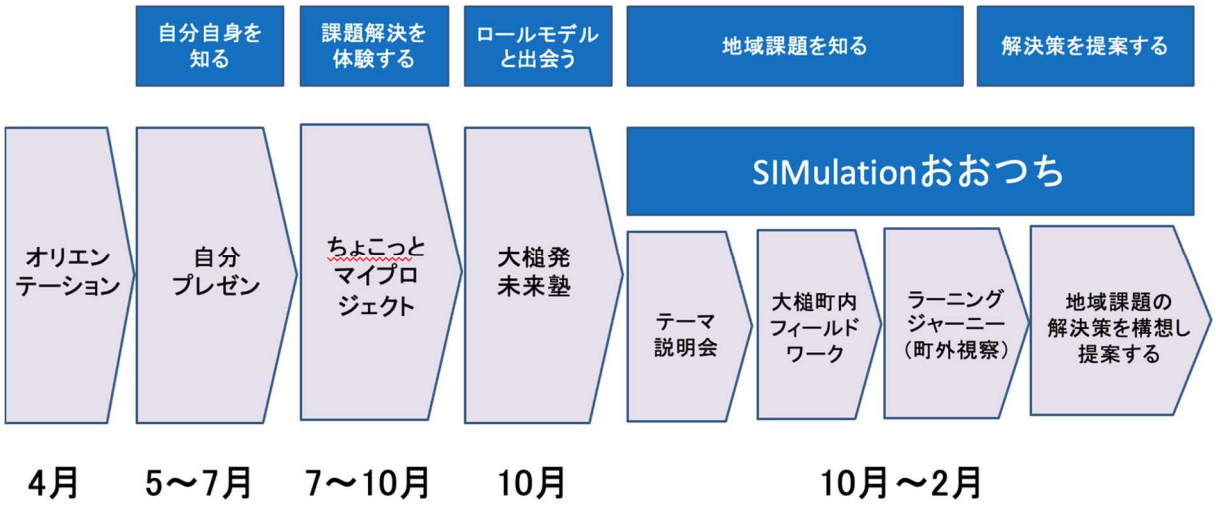
２年生では「テーマを探究する」をテーマに、自ら設定したテーマでプロジェクトを企画し、実行しながら探究を進めるマイプロジェクト活動に取り組んだ。各自の興味・関心から問いを設定し、他者や地域を巻き込みながら問いの検証を繰り返すことで、実践的な探究活動を目指している。

３年生では「進路に繋げる」をテーマに、大学・短大進学を目指す文理コースでは進路志望に関連したテーマでの探究活動、専門学校・就職を目指す「教養コース」では就きたい職業の未来を考える活動を実施した。また、18 年間で得た強みや知見を語るプレゼンテーション活動を通して、これまでの学びを総括した。

ア　１年生の取組

１年生では自分と社会に目を向けながら心が動くテーマを探すことを目標に、自分紹介プレゼンテーションや、町内外のゲストによる人生講話、大槌町役場へのヒアリングや町外視察を通して大槌町の地域課題解決に向けた提案を行う活動に取り組んでいる。２年生で行うマイプロジェクト探究活動に向けた下地作りの時期と位置付け、生き方・考え方を見つめ直し、自分と地域社会課題との関わりを考える機会を繰り返し設定している。

１年間を通した授業の流れは以下の通りである。



（ア） 自分プレゼン（４月～７月）

総合的な探究の時間を始めるにあたって、自己発見・自己理解を深めることを目的に、自分自身をプレゼンテーションする「自分プレゼン」の作成に取り組んだ。また、「自分プレゼン」を町内の中学３年生に行うことで、より深い理解につなげることを目指した。昨年度に引き続き、大槌学園・吉里吉里学園が合同で大槌高校に集まり、対面での発表会を実施した。

◆授業の流れ

回数	日程	内容
1	４月 11 日（火）	オリエンテーション
2	４月 18 日（火）	学びに向かう関係性づくり①
3	４月 25 日（火）	学びに向かう関係性づくり②
4	５月９日（火）	自分グラフを使っての自己理解
5	５月 16 日（火）	ストーリーシートの作成
6	５月 23 日（火）	ストーリーシートを深め合う
7	５月 30 日（火）	自分プレゼンをつくる①
8	６月６日（火）	自分プレゼンをつくる②
9	６月 20 日（火）	自分プレゼンをつくる③
10	６月 27 日（火）	自分プレゼン発表練習（リハーサル）
11	７月６日（木）	自分プレゼン発表会

◆オリエンテーション・学びに向かう関係性づくり

オリエンテーションでは、総合的な探究の時間の年間を通した目的と流れを説明し、自らの意志を持ち主体的に行動することへの意識づけを行った。また授業全体を通してお互いの意見や考えを交流させる機会が多いため、心理的安心のある関係性づくりのためアイスブレイク（共通点探しゲーム・傾聴トレーニング等）を実施した。

◆自分プレゼンの作成

今年度は、「なぜ私は大槌高校に入学したのか、そしてどんな高校生活を送りたいのか」をテーマにプレゼンテーションを作成。作成の最初に 15 年間の人生を振り返るにあたって、学年の教職員からも自分たちの歩んできた人生について発表した。また、作成中には、お互いのプレゼンテーションの内容を深めるため、生徒同士でお互いの考えに問いかけを行い深め合う活動も実施。最終的にはスケッチブックに清書し、紙芝居形式で５分程度のプレゼンテーションが完成した。

◆自分プレゼン発表会

日　時：令和５年７月６日（木）11：00 ～12：20

場　所：大槌高校 各教室

テーマ：「学園生に自分プレゼンを伝えることを通じて、自分についてより深く理解する」
「高校生の目標や生き方に触れることを通して、進路意識を高める」

対　象：大槌学園９年生（69 名)、吉里吉里学園９年生（９名）

日　程：

開始	終了	内容
11:00	11:05	【開会】 ・　開会挨拶／趣旨説明
11:05	11:17	【会場全体アイスブレイク】 ・　高校生代表によるアイスブレイク
11:17	11:30	【グループ内アイスブレイク】 ・　グループ内での自己紹介 ・　グループ内でのアイスブレイク
11:30	11:40	【発表】 ・　高校生１回目発表（７分） ・　質疑応答（３分）
11:40	11:50	・　高校生２回目発表（７分） ・　質疑応答（３分）
11:50	12:00	・　高校生３回目発表（７分） ・　質疑応答（３分）
12:00	12:05	【振り返り記入タイム】 ・　ワークシートに感想を記入する
12:05	12:10	【グループ内感想共有】 ・　班内で９年生から高校生に感想を伝える
12:10	12:15	【全体感想共有】 ・　挙手のあった生徒による感想共有
12:15	12:20	【閉会】 ・　学園生徒代表あいさつ ・　大槌高校生より閉会の言葉

【当日の様子】

司会進行・アイスブレイクの運営もすべて生徒が行い、高校生２～３名と学園生４～５名の小グループに分かれ、発表を行った。発表後は、中学生からの質問を受けたり、高校生が学校生活を紹介したりする時間を設けた。生徒たちは、後輩やお世話になった先生の前で、自らの経験を堂々と発表することができ、また中学生からの相談にも丁寧に応えることができた。

【生徒の感想】

- 発表をしている間はけっこう早く終わっちゃうかなと思っていたけれど、意外と７分間も話していて、多く話せたなと思いました。９年生の皆さんが真剣に聞いてくれて、更に質問を色々してくれて、楽しく発表をすることができました。今回の発表会を機に、大槌高校に来てくれる人が増えたらなと思います。
- 目の前の中学生の目を見て話せたと思うし、伝えたいことも全部言えたと思う。中学生の質問にもちゃんと返せたし、まだ話し足りないなという思いもありました。これを活かして、社会に出てからもこのように話せたらいいなと思いました。
- 正直、自分のプレゼンテーションに興味があるのかと思っていたけれど、私のプレゼンテーションをたくさんメモしてくれたり、うなずいてくれたりしてくれて、発表して良かったと思ったし、うれしかった。

（イ）ちょこっとマイプロジェクト

身近な課題解決を体験することを目的として、夏休み中に１週間で取り組む「ちょこっとマイプロジェクト」を実施した。これまでに取り組んできた自己理解の活動を発展させ、後続する SIMulation おおつちで町の課題解決に向けた提案を行うことを見据えて、この時期に設定した。自分の設定したテーマの現状と理想から、１週間程度で実施できる課題解決に向けたアイデアを考案した。最後に活動をポスターにまとめ、成果発表を行った。

◆授業の流れ

回数	日程	内容
1	7月 18 日（火）	オリエンテーション
2	7月 25 日（火）	「ちょこっとマイプロジェクト」計画立案
～「ちょこっとマイプロジェクト」実施期間～		
3	8月 22 日（火）	「ちょこっとマイプロジェクト」発表準備①
4	8月 29 日（火）	「ちょこっとマイプロジェクト」発表準備②
5	9月５日（火）	「ちょこっとマイプロジェクト」発表会

◆「ちょこっとマイプロジェクト」計画立案＆実施

生徒が立案した「ちょこっとマイプロジェクト」には、以下のような企画があった。

・ 友達の好きなアニメキャラクターのイラストを描いてプレゼントする。
・ 町内の郷土芸能団体関係者計 20 名にインタビューし、郷土芸能についてより詳しく知る。
・ 夏休みの中学生向けイベントにボランティアスタッフとして参加する。
・ 子育て中のお母さんがリラックスできるような託児と交流のイベントの開催。
・ お年寄りを笑顔にするために何ができるかを介護の仕事をしている人にヒアリング。
・ 人見知りを克服するため、アプリを活用して初対面の人と話してみる。
・ いつも使うバスケットコートの近くで、ごみ拾いを行う。
・ 自分のかっこいいと思うビートをアプリで作成する。
・ バスケのシュート率を上げるために、自分のシュートの傾向を分析する。

◆「ちょこっとマイプロジェクト」発表

活動の成果を、写真と共に B4 サイズのポスターにまとめ、８～９名程度のグループに分かれて、ポスターを使った成果発表を実施した。ポスターは、文化祭や町内のショッピングセンター等にも掲示し、生徒たちの活動を町民に広く伝えることができた。

（ウ）大槌発未来塾（10 月）

「大槌発未来塾」とは、町内外や多様な年代の方々との交流や価値観の触れ合いを通して、自らの生き方・考え方を見つめ、今後の進路・自らの未来を考えていくための材料とすることを目的とした企画である。１学期、総合的な探究の時間では自分と向き合うことを通じて、自分の興味関心を探るという活動を行ってきた。さらにその学習を進めるために、高校生のロールモデルとなりうる地域内外の大人を招いて話を聞く機会を設けた。

◆概要

日　時：令和５年 10 月 10 日（火）５・６校時
場　所：大槌高校 各教室
テーマ：「自らのテーマをもち、身の回りの課題解決に取り組むチャレンジャーと出会う」

対　象：大槌高校１、２年生
日　程：

開始	終了	所要	内容
13:20	13:30	10	［移動］ ・１ターム目の発表教室に移動 ・投影スライド等の接続確認
13:30	14:20	50	［ゲストとの対話①］ ・開会挨拶（10 分） ・ゲストによるプレゼンテーション（25 分） ・「探究はなぜ大切なのか」をグループで対話（10 分）
14:20	14:30	10	休憩・移動（次に聞くゲストの教室へ）
14:30	15:20	50	［ゲストとの対話②］ ・開会挨拶（10 分） ・ゲストによるプレゼンテーション（25 分） ・「探究はなぜ大切なのか」をグループで対話（10 分）

◆講師・プロフィール

No	分野	所属・氏名	プロフィール
1	地域	大槌町教育委員会事務局 学務課 平野 正晃氏	大槌町吉里吉里出身。釜石南高等学校卒業後、大槌町役場へ入庁。 地域の自治会で事務局を担当するほか、郷土芸能団体にも所属している。東日本大震災後は、町の基盤整備事業を担当。令和５年１月から大槌町教育委員会事務局学務課で“教育の町「おおつち」”の推進に取り組む。
2	保育	つつみこども園 芳賀 カンナ氏	大槌町吉里吉里出身。イカ釣り漁船の船主の父親と、助産師業 40 年、漁協婦人部、婦人会活動 35 年、福祉事業 32 年の祖母の姿をみて育つ。 現在、園長として地域に開かれたこども園を目指し日々子どもたちと楽しく過ごしている。
3	自動車	株式会社松橋自動車 松橋 康弘氏	大槌町吉里吉里出身。釜石南高校（現釜石高校）卒業後、北海道の大学へ。その後、岩手に戻り、2011 年から家業である現在の会社で働き始める。現在は、車の販売や修理の他、 観光バスやレンタカーの事業など車全般の仕事をしています。

4	まちづくり ・ジビエ	株式会社邑計画事務所 MOMIJI 株式会社 及川 一輝氏	岩手県金ケ崎町出身。岩手を出たくて大学で関東に行く。東日本大震災があった３月に大学院を卒業。まちづくりを仕事とする県内の会社に入り、平成 23 年 7 月から大槌で暮らしながら復興事業に携わる。今は県内の２地域（大槌と北上）に住み、仕事は主に３つ（まちづくり、ジビエ、岩手大学）。仕事ばかりの毎日だけど、work as life がベースであり、楽しく幸せな毎日を過ごす。
5	自然	NPO 法人 おおつちのあそび 大場 理幹氏	神戸市出身。東京大学大気海洋研究所進学を機に 2019 年大槌へ、自然の魅力を伝える NPO 法人おおつちのあそびを設立。釣りが好き、川遊びが好き、で大学に行き、魚の研究をする。大槌に来てから狩猟をやってみると、山遊びも面白くなってきたところ。自分の好きなことをみんなに知ってもらうのが好き。気づいたらそれが人に求められており、仕事になりそう。まだまだ先がわからないけど、楽しく生きています。
6	福祉	一般社団法人えがお 松﨑 実穂氏	釜石市出身。幼少期は田舎でのびのびと育ち、沢山の挫折を経験しながら「まあ、いいか！なんとかなるさ！」の気持で過ごしてきました。大好きなこどもと生き物に囲まれて生活をしています。今は一般社団法人えがおで、児童発達管理責任者として「みんなちがってみんないい」をモットーに元気に働いています。
7	医療	東京大学医学部附属病院 佐藤 駿一氏	長野県出身。2017 年から医師として働き始める。現在は、精神科医として子どものこころの診療を行う傍ら、大学院生として研究活動を行ったり、NPO 法人で発達障害やギフテッドの子どもと家庭の支援活動をしたりしている。今年の夏から、大槌町と東京の二拠点生活中。0 歳児の父。
8	教育	大槌町立大槌学園 三浦 翔太氏	大槌町出身。大学卒業後に、福岡ソフトバンクホークスに入団するが、３年で戦力外に。その後、岩手で教員採用試験を受け、

			平成 28 年度から中学校教員として勤務。仙北中学校(盛岡)で３年、久慈中学校(久慈)で３年、そして今の大槌学園が２年目。自分がやりたいことを全力でやってきた結果、現在に至る。
9	ゲーム・ 地域	株式会社 DMM 筒井　千春氏	千葉県船橋市出身、東京在住。ゲーム開発に関わり続け、現在は DMM.com に勤務。 1 年前より「地域活性化起業人」として、DMM.com から大槌町へ派遣中。月の半分を大槌で過ごし、東京との 2 拠点生活を送る。 日々の楽しみは、美味しい食事と美味しいお酒。
10	地域	一般社団法人 おらが大槌夢広場 黒澤　亜美氏	大槌町出身。大槌高校ではマイプロや復興研究会など色々な活動をしてきた。高校卒業後は、地元企業に就職したが、「大好きな岩手のために何かしたい！」と転職を決意。今年の４月から大槌町の移住コーディネーターとして活動している。

◆当日の様子

生徒は町内外から集まった 10 名の社会人のうち２名を選び、小グループでお話を聞いた。講師のみなさんからは、自身が取り組んでいる分野についてのお話しだけでなく、これまでの人生の中での悩み、葛藤やなぜ探究をする必要があるのかを丁寧にお話いただき、生徒たちが多様な生き方に触れ、価値観が広がる機会となった。

◆生徒の感想

- 大槌で自由に生きる、好きな事をすると言う大場さんの言葉を聞いてとても素敵で羨ましいなと言う気持ちになりました、その中で自分の好きな事を他の人へ話すという事が出来るのをすごく尊敬しました。
- 私は失敗することが怖くて、チャレンジすることを避けて安全な道だけを進んできたけれど、失敗をしてチャレンジすることが成長の１歩と聞いて、失敗を恐れないでチャレンジしていきたいと思いました。

・ 私は、子供たちとその保護者、地域の方についてのマイプロを考えていました。カンナさんのお話しを聞いて、まず興味を持ちいくつかの視点をもつことが大切だとわかりました。これから、人と人との繋がりを楽しみながら、自分の住む地域と向き合いたいです。
・ 「行動無しに奇跡は起こらない」という言葉が印象に残りました。諦めないで行動をすることを自分の進路に活かしたいです。主体性を持ち、感謝の気持ちを忘れないことを大切にしたいです。
・ 三浦翔太先生の発表を聞いてみて感じたことは、ここまで自分の将来の夢を追い続けることができる人がいることに感動しました。自分の将来の夢を追い続ける人がかっこいいと思いました。三浦翔太先生の発表から学習した「自分の思いを大切に」を自分のマイプロにも取り入れようと思いました。今日は本当にありがとうございました。
・ 私は人と関わることが苦手だけど黒澤さんのお話を聞いて、人と繋がることで色々な道が開けてくるんだなと思いました。私もマイプロだけでなく日々の生活でも人と関わることを大切にしようと思いました。

（エ）SIMulation おおつち

SIMulation おおつちとは、大槌町で起きている地域課題に対して、解決策を構想し提案する活動である。生徒が解決策を構想する地域課題テーマは、第９次大槌町総合計画に基づき、大槌町議会に設定していただいた。内容は下記の通りである。

No	高校生が解決策を構想する地域課題テーマ
1	大槌町民の磯焼けへの意識を高め、大槌の海を守るための施策を考えよ
2	若者の地元定着のための企業誘致と起業施策を考えよ
3	地域の防災に関わる消防団の担い手増加のための施策を考えよ
4	ふるさと納税を活用した町民サービス向上施策を考えよ
5	若者の声を取り入れた地域づくりのための施策を考えよ
6	震災の被害と教訓、復興への想い・感謝、希望を将来の世代につなげていくための（仮称）鎮魂の森の活用方法を考えよ

学習は以下の順で行った。

a　大槌町議会によるテーマ説明会
b　各テーマに関する町内の現状を調査する（大槌町内フィールドワーク）
c　町外を視察し、各テーマに対する解決策の先進事例を学ぶ（ラーニングジャーニー）
d　課題が生まれている原因を探り、解決策を構想する
e　解決策が実現可能か検証する
f　大槌町議会議場にて、構想した解決策を議員向けに発表
g　大槌町の課題解決アイデア発表会にて、構想した解決策を地域住民向けに発表

◆授業の流れ

No	日程	内容
1	９月 26 日(火)	オリエンテーション
2	10 月３日(火)	テーマ説明会に向けた事前学習
3	10 月 24 日(火)	大槌町議会によるテーマ説明会
4	10 月 26 日(木)	フィールドワーク事前学習 （テーマに関する調べ学習、質問出し）
5	10 月 31 日(火)	大槌町内フィールドワーク
6	11 月７日(火)	大槌町内フィールドワーク振り返り
7 8	11 月 21 日(火) 11 月 28 日(火)	ラーニングジャーニー事前学習 （視察先に関する調べ学習、質問出し）
9	12 月５日(火)	ラーニングジャーニー（町外視察）
10	12 月 12 日(火)	ラーニングジャーニー振り返り
11 12 13	12 月 19 日(火) １月 16 日(火) １月 23 日(火)	課題の検討、課題解決アイデアの構想、検証
14 15 16	１月 30 日(火) ２月 13 日(火) ２月 15 日（木）	発表に向けた資料作成、発表練習
17	２月 20 日(火)	議場発表会 （グループごとに構想したアイデアについて大槌町議会議員に発表）
18	２月 22 日(木)	発表修正、発表練習
19	２月 23 日（金・祝）	課題解決アイデア発表会 （グループごとに構想したアイデアについて地域住民に発表）

ａ　大槌町議会によるテーマ説明会

10 月 24 日（火）に、大槌町議会の菊池忠彦議員、東梅守議員、澤山美恵子議員、阿部三平議員、芳賀潤議員からテーマに関する説明を行っていただいた。生徒はそれぞれのテーマに関する基礎的な情報や、大槌町の現状についての理解を深めた。その後、生徒自身が取り組みたいテーマの希望調査を行い、調査の結果をもとに各テーマに 10 名ずつ振り分けた。10 名をさらに５名ずつの２つのグループに分け、活動がスタートした。

b　各テーマに関する町内の現状を調査する（大槌町内フィールドワーク）

各テーマに関する町内の現状をより深く理解するために、大槌町内でのフィールドワークを行った。フィールドワークは、前半に大槌町役場職員へのヒアリング、後半にテーマに関連する施設や住民を訪問する形式で実施した。

No	分野	役場ヒアリング担当課	訪問先
1	磯焼け対策	産業振興課	大槌町藻場再生協議会 芳賀 諒太 氏
2	若者の地元定着	産業振興課	大槌商工会 佐々木 優 氏
3	消防団の担い手増加	大槌消防署	大槌町消防団 第１分団第２部 金﨑 拓也 氏 小国 琢 氏
4	ふるさと納税	産業振興課	MOMIJI 株式会社 松下 亜香里 氏
5	若者の声を取り入れた地域づくり	協働地域づくり推進課	特定非営利活動法人吉里吉里国 松永 いづみ 氏
6	（仮称）鎮魂の森の活用	協働地域づくり推進課	大槌町役場 地域整備課 木下 亮 氏

【当日の様子】

生徒たちは最初に大槌町役場もしくは大槌消防署を訪問し、テーマの担当課から大槌町の行政事業について説明を受けた。また、事前に用意した質問をもとに生徒たちからのヒアリングを実施した。活動の後半では、テーマに関連する施設や団体を訪問し、ヒアリングや体験活動を行った。

【生徒の感想】

・今回役場の方から聞いた話の中で 1 番驚いたのが、自分が思っていた磯焼けの意味と本当の磯焼けでは少し違うことです。自分が思っていた磯焼けはウニに海藻が食べられてしまい海藻が生えなくなってしまうことだと思っていました。しかし本当の磯焼けはちょっと違って、海藻は生える時季が限られていて、その生える時季になっても生えないことも磯焼けと言うことが分かりました。そして、藻場を増やすことにより、CO_2の削減につながり一石二鳥になるということが分かりました。

・今回役場の職員の方の話を聞いて、大槌町の若者の意見がどんなふうに対応されているのかがわかりました。色々な年代の人々が今何を求めているのかを意見で聞き、計画をして大槌町の運営がされているのがわかりました。自分も若者の一人として、大槌町に意見を一つでも多くいえるようにしたいです。そして、「大槌町がたくさんの意見などで発展し続けていくことができるよう広聴していく」という言葉が印象に残りました。

・大槌町の消防署の元となる大槌消防組が明治 28 年という昔からできていたことに驚いた。消防に人が入らない原因を聞いて、自分が考えていたもの以外の原因が今回の話で聞けてよかった。危険が伴う仕事なのに入ろうと思った理由が、人のためになる、人の命を救いたいなど、かっこいいものが多かった。自分も人の役に立つ仕事をしてみたいので消防のことに興味をもった。最近の災害は豪雨など規模が大きくなっていて忙しそうだった。一番大変なのはやっぱり東日本大震災で、精神的にもくるのがよく分かった。震災や若者が減ったせいで担い手が減少しているのもよく分かった。

c　町外を視察し、各テーマに対する解決策の先進事例を学ぶ（ラーニングジャーニー）

各テーマに関する課題解決のための先進的な事例を学ぶために、大槌町外の自治体や民間団体を訪問し、調査活動を実施した。最終的に町への提案アイデアを考えるにあたり、大槌町に活かせる知見を持ち帰ることを目指した。また、ラーニングジャーニー時点での解決策の仮説を用意して訪問し、訪問先でフィードバックもいただいた。訪問するエリアは、いずれも各テーマに対して先進的な取組を行っている、岩手県の大船渡市、久慈市、一関市、陸前高田市、宮古市と、宮城県の気仙沼市に設定した。

◆訪問先

No	テーマ	行き先	場所・内容
1	磯焼け対策	大船渡市	【AM】甫嶺復興交流促進センター/NPO 法人三陸ボランティアダイバーズ 佐藤氏よりお話 【PM】越喜来波板海岸/スポアバッグ作成・藻場観察
2	若者の 地元定着	久慈市	【AM】ユベントス/任意団体 OLD NEW 馬内氏よりお話 【PM】久慈市役所/企業立地課

3	消防団の 担い手増加	一関市 大船渡市	【AM】国際医療福祉専門学校 一関校/ 一関市学生消防団員との座談会 【PM】大船渡消防署/大船渡市消防団よりお話
4	ふるさと納税	陸前高田市	【AM】陸前高田市役所/商政課・財政課 【PM】NPO 法人桜ライン 311 岡本氏よりお話
5	若者の声を 取り入れた 地域づくり	宮古市	【AM】宮古市役所/企画課 【PM①】NPO 法人みやっこベース 坂本氏よりお話 【PM②】宮古市青年会議所 小野寺氏よりお話
6	（仮称）鎮魂 の森の活用	気仙沼市	【AM】気仙沼市復興祈念公園/ 気仙沼市危機管理課より案内 【PM】気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館見学、語り部

◆当日の様子

グループごとに現地へ行き、１日を通して各地域の課題解決の取組を視察した。現地では午前と午後に渡り２ ～3つの事業所の方のお話を聞いた。

各視察先では体験活動等を実施していただき、地域課題に実際に触れつつ、楽しみながら活動に参加することができた。

◆生徒の感想

・OLD NEW 馬内さんのお話を聞いて、地元を盛り上げようとする姿勢がすごいと思った。OLD NEW さんは地元をもっとよくしたいと、地元にチャンスを感じた馬内さん始め三人から始まっていて資金が少なくても空き家やクラウドファンディングを利用し、起業のしやすさをこれから起業したいと考えている人に伝え、サポートしていた。また、ユベントスを借

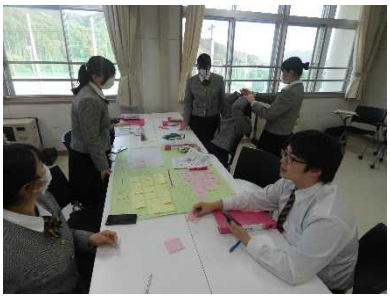
りる事ができるスペースにし、起業する人が借りるなど、地元を盛り上げる場にしようとしている姿がすごいと思った。これからの活動の参考にしたい。

・映像や校舎、講師の方の話を聞いて、当時の震災のすごさや怖さを感じることができました。映像は津波や地震で、物が倒れたり流されたりしている状況などのことと当時の階上中学校の卒業式の様子や中学生の話しているところを見て、パニックになるものがあってとても見ていてつらかったです。校舎を見に行って、講師の方の話を聞き、震災のことを深く理解できました。震災が起きたそのときの校舎の様子やそのとき何があったのかを知れて、とても良かったです。

・陸前高田市役所のお二人からお話を聞いてみて、印象に残っているのは、陸前高田市では思いやり型返礼品やクラウドファンディング型ふるさと納税を採用し、団体の活動の応援や、交流事業の実施に役立っているということだ。大槌町でもこの 2 つの方式を取り入れて欲しいと思った。また、集まった寄付金は様々な事業へ充てており、直接市民へ還元される形になっていることに感心した。そして、自分達が考えた施策にアドバイスをして頂けた。陸前高田市の取り組みでいいなと思った部分をもとにこれからの施策を考えていき、よりよい物にしていきたい。

d　課題が生まれている原因を探り、解決策を構想する

フィールドワークを経て、各グループがテーマに対する「現状」と「理想」を掲げ、そのギャップから生まれている「問題」を設定し、その「問題」を解決するための解決策を構想した。



e　解決策が実現可能か検証する

上記を踏まえて構想した解決策アイデアが本当に実現可能なのか、関係先に電話で問い合わせをする、企画した動画を撮影するなどの検証を行った。

その後、発表会に向けた資料の作成や発表練習を行った。資料の作成はすべて Microsoft teams を活用して、生徒全員が共同編集できる形式で進めていった。

ｆ　大槌町議会議場にて、構想した解決策を議員向けに発表

各チームが構想したすべての解決策のアイデアを、大槌町議会の議員に対して発表した。

◆発表会概要

日　時：令和６年２月 20 日（火）10：00 ～12：00、13:30～15:30 の二部制

場　所：大槌町議会 議場

◆当日の流れ

（午前：総務教民常任委員会の３テーマに対する提案）

10：00～10：04　開会・総務教民常任委員長あいさつ

10：04～10：38　テーマ①に対する提案Ａ・Ｂ

10：38～10：55　テーマ②に対する提案Ａ

10：55～11：05　休憩

11：05～11：22　テーマ②に対する提案Ｂ

11：22～11：56　テーマ③に対する提案Ａ・Ｂ

11：56～12：00　閉会・教育長総括

（午後：産業建設常任委員会の３テーマに対する提案）

13：30～13：34　開会・産業建設常任委員長あいさつ

13：34～14：08　テーマ①に対する提案Ａ・Ｂ

14：08～14：25　テーマ②に対する提案Ａ

14：25～14：35　休憩

14：35～14：52　テーマ②に対する提案Ｂ

14：22～15：26　テーマ③に対する提案Ａ・Ｂ

15：26～15：30　閉会・教育長総括

◆当日の様子

これまでのフィールドワーク等で学んだこと及び構想した解決策のアイデアの提案を、PowerPoint にまとめて 10 分程度で発表した。議員の方々から、実現可能性も含めた質問や感想をいただいた。

g　大槌町の課題解決アイデア発表会にて、構想した解決策を地域住民向けに発表

各チームが構想した解決策のアイデアを、地域住民やラーニングジャーニーでお世話になった方々に対して発表した。

◆発表会概要

日　時：令和６年２月 23 日（金・祝）10：40 ～12：00

場　所：大槌町文化交流センター おしゃっち

テーマ：「大槌町の地域課題に対する解決策のアイデアを発表する」

◆当日の流れ

10：40 ～11：05　発表ターン１　※４会場に分かれて実施

11：05 ～11：30　発表ターン２　※４会場に分かれて実施

11：30 ～11：50　発表ターン３　※４会場に分かれて実施

11：50 ～12：00　各会場で振り返り

◆当日の様子

議場発表会でいただいたフィードバックを反映させて、発表を行った。多くの地域住民から生徒たちの解決アイデアに対する感想や質問をいただいた。

◆発表内容・解決アイデア一覧

No	テーマ	班	解決アイデア名	概要
1	磯焼け対策	A	実はいろいろ?! ウニ殻の活用法	磯焼け対策をする中で潰してしまっているウニ殻を活用し、スイカとピーマンを育てて大槌町の新たな特産品とし、その収入をウニの畜養に活用することを提案した。
		B	大槌の海が危機に!?「モグラー増加プロジェクト」　とは	大槌町の若者を対象に、ダイバーと一緒に大槌の海を潜り、磯焼けの光景を見るイベントを行い、参加回数に応じてウニの試食などの特典をつけることを企画。
2	若者の 地元定着	A	原石発掘！大槌チャレンジフェスティバル	「やってみたい」という気持ちを形にできるイベントを開催し、出展者同士がつながってコミュニティをつくることで、起業のハードルを下げることを目指す。

		B	１つ企業を誘致する！	若者が働きたい、地元に残りたいと思う要素について調査し、その結果をもとに３つの企業に対して、大槌町への出店を打診。
3	消防団の担い手増加	A	大槌消防大会	高校生消防団部（仮）を結成し、消防団の訓練内容を体験する大会を開くことで、消防団の活動を知るきっかけをつくることを考えた。
		B	体験版 消防放水チャレンジ	消防団のネガティブなイメージを払拭するため、大槌町内の小中学生を対象とした、楽しめる放水訓練イベントを企画。
4	ふるさと納税	A	ふるさと納税で避難所を快適にしよう！	夏に災害が起きた場合、熱中症の危険にさらされてしまうことに着目。避難所の空調を整備し、災害関連死を防ぐことを提案。
		B	ふるさと納税を活用して、子育てしやすい町を…	少しでも大槌町内の子育て世代が楽になるように、ふるさと納税を使って入学時や進学時に使える商品券を配布することを提案。
5	若者の声を取り入れた地域づくり	A	コンバーター～選挙と若 者を繋いでいく～	高校生が「コンバーター＝変換器」となって、若者にはわかりにくい選挙の情報を、興味を持ってもらえるように伝えたいと考えた。
		B	若者に寄り添った情報発信を！	町が行っている取り組みが若者に知られていないため、若者が良く使う SNS 上に動画をあげ、若者の意見を集めることを企画。
6	（仮称）鎮魂の森の活用	A	未来世代への伝承ツアー	（仮称）鎮魂の森を含む被災地をめぐる日帰りツアーを企画し、ツアー内で高校生が伝承者となって震災を語り継ぐことを考えた。
		B	被災地の灯り	３月 11 日もしくはお盆に、町民を対象にしたキャンドルナイトを開催し、復興への感謝や犠牲者への想い、個人の持っている想いを消化することを考えた。

◆生徒からの感想

・ テーマ説明会でふるさと納税に興味がわいたので、ふるさと納税をやりました。ふるさと納税では、自分からしたら大槌町が意外とお金をもらっていたけれど、全国で見たら少ない方だということがびっくりした。桜ラインさんでは、ふるさと納税を自分たちのためだけに使うのではなく、地域のみんなに喜んでもらえるようなことに使うということを学んだ。それから、SIM おおつちで考え方が変わったので、すごくいい活動になった。

・ SIM おおつちを通して、磯焼けの深刻さや大変さを学ぶことができた。磯焼けがどうすれば改善、修復するのか、自分なりに考えて、周りや先生に伝えることができた。磯焼けの海に与える影響が大きくて、これからしっかり抑えていかなければいけないことが学べ

た。これから磯焼けをどうしていくべきなのか考えることができた。

- 若者の声がどのくらい届いているのかを知ることができた。選挙について自分たちは考えたけれど、若い子は投票率が少ないし、自分たちが積極的に参加することが大切だと思った。これから自分たちができることがあったらがんばりたい。
- SIM おおつちがなかったら考えることのない「消防団の担い手増加」というテーマに着目して、活動を進めることができてよかった。フィールドワークで色んな人と話していくうちに、SIM おおつちをやる前より人前での発表に緊張しなくなった。今回はグループで周りに人がいたからそこまで緊張しなかったけれど、来年のマイプロ発表は 1 人なので頑張りたい。
- チェーン店を大槌に誘致できない理由は人口が少ないからだと思っていたけど、実際に電話してみて、物流のことや、色々な面で誘致できないことを知れたので、疑問に思ったことは実際に聞いてみるといいことを学びました。発表会のときには、自分たちになかった意見を聞くことができたのでよかったです。
- SIM おおつちを通して、岩手県がうけた被害、また、ここ大槌で受けた被害などフィールドワークにて深く知ることができました。そして、県内だけと言わず、宮城県の気仙沼市までフィールドワークをしに行き、そこで起きた被害及び復興祈念公園での工夫などを聞いて、自分たちの案に活かせたと思います。

イ　２年生の取組

２年生では、生徒各自が興味関心から取り組みたいテーマを設定し、問いを立てながら検証アクションを繰り返していく「マイプロジェクト」に取り組んだ。

４、５月は、自分の興味や身の回りの気になることを模索しながら、個人でテーマを設定した。６月からは、各自のテーマに関する問いを立て、検証アクションを実行した。７月にはフィールドワークを行い、生徒のテーマに関連する地域の方からの協力を得ながら活動を実施した。

８月以降は、生徒や教員が５つのゼミに分かれて、個々で進めるプロジェクトを共有・相談するコミュニティをつくりながら授業を展開した。また、オンラインを活用し他県の高校生とお互いの探究の進捗状況を共有し合うオンライン探究交流会（６月、11 月、２月）や、地域の集会所や公民館などの５か所での中間発表会（11 月）、地域での最終発表会（２月）も実施し、自身の学びを振り返り、他者に向けて発表する機会を定期的に設定した。

プロジェクト活動の指導にあたり、認定ＮＰＯ法人カタリバのスタッフ４名に協力をいただいた。

１年間を通した授業の流れは以下の通りである。１回の調べ学習だけで活動を終わらせずに、年間を通して問いを更新し続けることを目的としてカリキュラムを設計した。

（ア）テーマ設定（４月）

◆気になること探しワーク・テーマの設定

自分の過去の経験から印象に残った出来事を振り返ったり、新聞や広報誌を見て気になる記事を探したりしながら、テーマに繋がりそうなキーワードを書き出した。その上でプロジェクトのテーマとそれに関連する３つのキーワードを個人で設定した。

（イ）マイプロジェクトの問いⅠ（５月～７月）

◆“常識を疑う問い”から、ちょこっとマイプロを実行しよう

「本当に（テーマ）は〇〇なのか？」という“常識を疑う問い”を設定した。

“常識を疑う問い”を検証するために、１週間程度で実行できるアクション（ちょこっとマイプロ）を計画し各自がアクションを実行した。また、その成果を伝え合う場を設けた。

【生徒のちょこっとマイプロの例】

・ふるさと納税の返礼品で何か頼んだことがあるか調査する

・タイピングを毎日練習し、同じ文章を打つ時間を記録する

・冷蔵庫にある食品で、できるだけ栄養のある食事を作ってみる

・海外の文化を知るため、韓流映画や洋画を観る

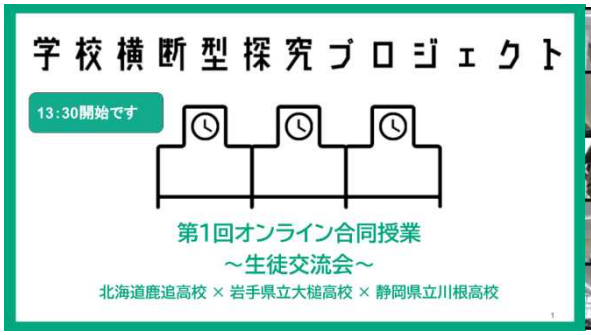
◆“アイデアを広げる問い”からプロジェクトの未来を考えよう

ペアになりお互いの興味関心のあるテーマを聞き、それに対して質問をし合うことで、お互いのテーマについて掘り下げることができた。

◆第１回オンライン探究連携授業（６月７日）

小規模校３校がオンラインで集まり、互いの探究活動を共有しながら学びを深めていく「オンライン探究交流会」を実施した。本校の生徒 55 名と、北海道鹿追高等学校生徒 30 名、静岡県立川根高等学校の生徒 28 名が参加し、オンラインビデオ通話を活用して交流した。

１回目の交流会では、「聴く姿勢を身に付けながら、お互いの共通点や違いを知る」をテーマに、各校の紹介や生徒同士のアイスブレイクなどを行った。



◆マイプロジェクト・フィールドワーク（７月 19 日）

各自の探究活動を進めていくにあたり、各テーマに精通した地域の大人と出会うことを目的として「マイプロジェクト・フィールドワーク」を実施した。

生徒のテーマから 31 ヶ所の訪問先及び講師を設定し、生徒たちが各講師のもとに出向いて、プロジェクトの進め方や今後の方向性などについて相談をした。また、遠方の講師については、オンラインで実施した。

【テーマ・講師一覧】

No	テーマ	講師名（所属）★はオンライン参加
1	韓国文化	南景元氏（大槌町スクールソーシャルワーカー）
2	教育	森谷聡氏（大槌町立大槌学園教諭）
3	郷土料理	中村恭香氏（いわて NPO フォーラム事務局）
4	地域活性	小國夢夏氏（一般社団法人大槌町観光交流協会）
5	音楽	内金崎大祐氏（内金崎自転車商会）
6	地域活性	黒澤聖也氏（大槌町役場産業振興課）
7	医療	看護師のみなさま（植田医院）
8	美容	小林えり香氏（a lounge heath）
9	郷土芸能	東梅英夫氏（臼澤鹿子踊り保存館伝承館）
10	教育	芳賀カンナ氏（幼保連携型認定こども園つつみこども園）
11	福祉	川崎教申氏（在宅複合型施設ゆーらっぷ）
12	海洋生物	早川淳氏（東京大学大気海洋研究所大槌沿岸センター）
13	震災伝承	古舘和子氏（認定 NPO 法人　はまゆり復元保存会）
14	音楽	植田誠也氏（ブリッジ・クロージング）
15	動物	鈴子真佐美氏（保護猫アンドゥ）
16	漫画	藤澤暉氏（大学生）★
17	心理	加藤聡氏（元日本テレビアナウンサー）★
18	心理	久保葵氏（大学生・マイプロジェクト経験者）★
19	校則検討	古野香織氏、浜田未貴氏（NPO 法人カタリバ　ルールメイキング事業部）★
20	地域コミュニティ	林将平氏（NPO 法人 WELgee）
21	サービス	佐藤杏菜氏（株式会社ブライド・トゥービー）★
22	スポーツ	澤一彰氏（大槌サッカークラブジュニアコーチ）
23	栄養	越田宜弘氏、村上舞瞳氏（大槌町役場健康福祉課）
24	心理	道岡美和子氏（大槌町学園スクールカウンセラー）
25	料理	阿部勉氏（エルマーノ）
26	心理	佐藤駿一氏（東京大学附属病院児童精神科医）★
27	料理	澤山広氏（末広食堂）

28	健康	村上百合子氏（岩手県立大槌高等学校養護教諭）
29	語学	継枝斉氏（岩手県立大槌高等学校校長）
30	その他	黒澤亜美氏(一般社団法人おらが大槌夢広場)
31	その他	金森俊一氏（NPO 法人カタリバ　経営管理本部）

◆夏休み中のアクション計画（７月）

フィールドワークでのアドバイスを活かし、夏休み中のアクションを計画した。

（ウ）マイプロジェクトの問いⅡ（８月~10 月）

◆ゼミ活動

夏休み明け以降は、授業時間等を使い各自で探究活動を進める体制に入った。町内の協力者のもとへ足を運んで調査活動を行う姿や、ＰＣ・タブレットを使ってオンラインインタビューを行う姿など、外部の方々に協力を求めながら活動を進める様子が見られた。

生徒のテーマや教員の専門分野をもとに５つのゼミをつくり、ゼミごとに各自の探究活動の進め方を相談し、定期的に生徒同士が互いの進捗状況を共有した。

◆マイプロジェクトの中間発表会（11 月８日）

問いⅠ、問いⅡ期間のまとめとして、地域の集会所や公民館をお借りし、計５か所に分散して中間発表を実施した。生徒各自が、半年間実施してきた活動の進捗とそこから得た学びについてプレゼンテーション形式で発表した。

（エ）マイプロジェクトの問いⅢ・まとめ（11　月～２月）

◆第２回オンライン探究連携授業（11 月 17 日）

６月の１回目の交流会に引き続き、２回目のオンライン交流会を実施した。４校の生徒が関心の近い生徒同士で小グループをつくり、各自が探究活動を紹介し意見交換を行った。それぞれが、自身の活動を振り返るとともに、今後の探究を深めるヒントを得る機会となった。

◆活動の振り返り・まとめ（１月）

11 月以降も、引き続きゼミごとに分かれて生徒が各自で探究活動を進めていった。

冬休み明けの１月以降は、ワークシートを活用しながら、これまで立てた問いやその検証アクションを整理するとともに、活動を通して得た学びについて振り返る機会をとった。

◆第３回オンラン探究連携授業（２月 14 日）

３回目のオンライン交流会を実施した。３校の生徒が関心の近い生徒同士で小グループをつくり、一年の探究学習の成果を発表し合った。お互いの成果を認め合い励まし合う場となった。

◆最終発表会（２月 23 日）

最終発表会は大槌町文化交流センターで実施し、これまでに生徒の活動に関わった方々をはじめ、生徒、保護者、地域住民、教職員、教育関係者等、総勢 230 名の参加となった。生徒は、各自が１年間の探究活動の成果と学びについてプレゼンテーションにまとめて発表した。

（オ）プロジェクト実践事例

◆分野・活動内容一覧

No	分野	発表タイトル	活動内容
1	国際	外国の食文化	実際に外国の方に英語でヒアリングをしながら、様々な国の食文化への理解を深めた。
2	音楽・心理	音楽はストレス緩和できるのか？	音楽と感情の関係について、フィールドワークやヒアリングを通して探究をすすめた。
3	料理	お世話になった人に料理を振る舞う	自分が一番お世話になった人に料理を食べてほしいと考え、調味料や火加減などを調整しながらどうしたら美味しい中華料理を作ることができるか探究した。
4	教育・福祉	TKG プロジェクト	生徒一人ひとりが、お互いの本音を語り合える環境作りを目指し、生徒が対話できる場を設定した。
5	栄養	塩分摂取について	岩手県沿岸部は塩分摂取量が県平均よりも高いことから、どうしたら塩分を取りすぎないで食事ができるかについて探究した。
6	医療	理学療法士について	理学療法士について知識を深め、理学療法士の人口を増やすためにはどうしたらよいかについて解決策を考えた。
7	心理	安心させるコミュニケーション	人によって態度を変えてしまう自分を変えたい。看護師を目標にしているが、誰に対しても安心感を与えられるようなコミュニケーションについて探究した。
8	料理	オリジナルのレシピを広めたい	自分のオリジナルの唐揚げをつくるために試行錯誤して、レシピを完成させた。
9	サービス	free wedding ～幸せをカタチに～	結婚式を実施しない人が一定数いることを受け、結婚式の在り方や意義について探究した。
10	芸術	人を惹きつけるステージ演出	アーティストを魅力的に見せたり、観客を惹き付けるような舞台の構成を考え、実際に文化祭で実施した。

11	健康	睡眠とスポーツの関係	睡眠時間とスポーツのパフォーマンスの質にどんな関係があるのか探究した。
12	郷土料理	すっぷくをひろめたい！第2弾	安渡公民館長さまを中心としたご協力をいただき、地域で100食以上すっぷくのお振舞を実施した。
13	心理	"不安と向き合いながら幸せに生きるためには？"	不安の解消法について調べてきたが、ヒアリングから不安にもメリットがあることに気づき、向き合い方を考えていくことになった。
14	環境	海洋ゴミを活かし新たな価値を	はま研究会に所属し、漂着物について研究してきた。海ゴミ問題に着目し、海ゴミを減らすために人々の海ゴミへの関心を高めることが必要だと考えた。その方法として海ゴミを使ったアクセサリー創作のイベントを行った。
15	機械	動物型ロボット	どんな動物型ロボットがあるとよいかについて、ヒアリングを通して考えた。
16	美容	ヘアケア、美容師について	美容師という職業についてや、ヘアケアの種類について調査し、髪の悩みに合ったヘアケアについて整理した。
17	郷土芸能	郷土芸能がつくる心の「クモの巣ネットワーク」"	ヒアリング、アンケート調査、座談会などを通して臼澤鹿踊りを存続させるためのネットワークの在り方について探究した。
18	心理	"「好きなこと語ってみない？」～匿名性ならではのコミュニケーション広場～"	当初は悩みを語り合う広場を作りたいと考えていたが、ポジティブなことを話し合え、集まりやすい広場を開催することになった。
19	郷土芸能	お祭りとの関わり方	祭りと郷土芸能について調査し、郷土芸能の人口が増えるにはどうしたらよいか考えた。
20	地域	震災前と震災後の町並みの変化	震災前と震災後の吉里吉里の街並みをヒアリングや写真で比較し、変化について考察した。
21	福祉	子育てとジェンダーバイアス	子育てとジェンダーバイアスの関係について、実際に子育てをしている方からのヒアリングなどを通して探究した。
22	校則検討	メイク×校則	メイク禁止の校則について生徒や教師、企業にアンケートやヒアリングを実施し、校則を検討した。
23	健康	睡眠の大切さについて	睡眠の質を高めるためにはどうしたらよいかについて調査した。
24	技術	タイピングstudy	タイピングを速くするためにどうしたらよいかと考え、よい練習方法について探究した。

25	アート・心理	人の感情と色の関係	色に対する人の感情の変化について調査し、色のもつ力について調査した。
26	動物	保護猫活動	保護猫の譲渡率についてや保護猫を出さないようにするためにはどうしたらよいのかについて考えるため、ヒアリングや文献調査を行った。
27	地域活性	I ターン・U ターンについて	人口減少についての現状を知り、Ｉターンや U ターンなどの関係人口について調査した。
28	アート・地域活性	アートの解剖【楽】	アートに対する意識調査を行い、生まれ持った条件に左右されずにアートを楽しめるよう、イベントを開催した。
29	スポーツ	シュート率 UP	バスケットボールの３ポイントシュートが入る確率を高めるためのメニューを実践ながら、考案した。
30	料理	オリジナルのお菓子	製菓店のフィールドワークで調味料で風味や食感が変わると知り、自分のオリジナルのお菓子を試作した。
31	音楽	HIPHOP	HIPHOP の文化やビートの違いについて理解を深め、実際に曲を作った。
32	地域活性	ありがとう！おにぎりプロジェクト	温かなコミュニティ作りを目指し、普段は気づかないつながりを可視化させる取り組みを行った。
33	栄養	人の役に立つ豆知識	一人暮らしの人が節約かつ健康的な食生活を送るにはどうしたらよいかについて知識を深め、食品の冷凍方法について探究した。
34	国際	韓国を知ろう	韓国が好きだったことから韓国文化について調べ、実際に韓国料理を作り友達や家族と食べることで韓国文化への理解を深めた。
35	福祉	手話のコミュニケーション	手話は多言語と同じであるということを学び、災害時や医療現場でも必要だと思った。少しでも手話ができる人が増えてほしいと考えイベントを実施した。
36	心理・福祉	少年犯罪	どうして少年犯罪を起こしてしまうのかについて、家庭環境など要因がどこにあるのかについて調査した。
37	環境	海のゴミが生物に出す被害	はま研究会の活動で海のゴミについて関心をもち、海洋生物にどのような影響がでるのか調査した。
38	地域活性	お菓子で繋げる大槌と将来	大槌の地域活性化につなげるため大槌の特産品を使ったお菓子を試作した。
39	スポーツ	部の雰囲気と部員数の関係	部活動の雰囲気と部員数には相関関係があるのかどうかについて、アンケートの調査等を通して考察した。

40	教育・福祉	サードプレイス	小・中学生の安心していられる場所をつくりたいと思い、サードプレイスの運営者へのヒアリングや自分自身がコラボスタッフのボランティアを経験したりし、子どもたちとの関わり方を学んだ。
41	福祉	ユニバーサルな生活と共に	自身が左利きなこともあり、誰もが過ごしやすい生活環境とはどのようなものかについて探究した。
42	国際・福祉	韓国と日本の自殺について	若者の自殺率が高い韓国と日本の社会の共通点をヒアリングや文献調査を通して、見つけ出した。
43	心理	人の目を気にするのはなぜか	どうして日本人は人の目が気になってしまうのかについて、アンケート調査を実施した。
44	地域活性	イベントしてみた！	大槌サーモンの認知度向上のため、観光交流協会の方や町の産業振興課の方と協力して、サーモンフェスティバルでSNSを活用した取組を実施した。
45	地域活性	「マキ」から紐解く「個」ミュニティ	他者を集団として一括りに見るのではなく「個」として見るため、既存のコミュニティについて調べ初対面の人と話すイベントを行った。
46	地域活性	高齢者の方にとってわかりやすい町民バスの時刻表とは？	町民バスを利用しやすくすることが高齢者のひきこもり防止につながると考え、わかりやすいバスの時刻表を考え作成した。
47	心理	心理カウンセラーについて	心理カウンセラーへヒアリングを通して、カウンセラーという職業についての知識をつけたり、若者の心の問題について考えたりした。
48	教育・福祉	幸せの種をまこう ~私の言葉で防ぐ児童虐待~	これから起こりうる虐待を未然に防ぐ取組が自分にできることだと考え、福祉課や保育園長へのヒアリングを重ねたり、高校生へのイベントを行った。
49	地域活性	ふるさと納They	大槌町のふるさと納税額を増加させるためにはリピート率を高めることが必要だと考え、他地区の返礼品の工夫店などについて調査した。
50	福祉	誹謗中傷を減らすためには	誹謗中傷を減らすため、中高生を対象としたイベントを実施。また、ポスターも作成した。
51	美容	髪質にあったカット・パーマ	美容室で一人ひとりの髪質に合ったカットやパーマについて整理したものを提示すると、お客さまがメニューを選びやすいと考え、パンフレットを作成した。
52	地域活性	大槌を知り、大槌を伝える	大槌の観光スポットを知ってもらうために、オリジナルのパンフレットを作成した。

53	教育・福祉	起立性について	自分自身の起立性調節障害による苦しみを理解してもらおうと、教員や友達を巻き込んだイベントを実施した。
54	栄養	健康でいるために	栄養欠乏について知り、手軽に摂取できる栄養素が入ったクッキーなどを実際に作った。

《事例①すっぷくをひろめたい！第２弾》

大槌の郷土料理であるすっぷくの味に感動したが、地元の若い世代にあまり知られていないことに疑問、危機感をもちプロジェクトをすすめた。安渡公民館自治会長をはじめ、地域のみなさんにご協力をいただき、地域で 100 食以上すっぷくのお振舞を実施した。そのイベントから自分自身の変化に気付き、自分と同じような境遇（ルーツが２つある）の人たちが、移住した場所に居場所をつくることに郷土料理は有効なのではないかと考えた。

《事例②ありがとう！おにぎりプロジェクト》

はま留学生が次々と学校から転出してしまったことを受け、自分にできたことがあったのにできなかった後悔からプロジェクトを開始。復興研究会の経験や自身の震災時の経験から「困った時には助け合う」という世界が、日常世界にもあってほしいと考え、大槌町役場でありがとうを伝え合う「ありがとう！おにぎりプロジェクト」を実施した。そのアクションから、ありがとうの裏には、目に見えにくい困り感があると認識。その学びをもとに、学校というフィールドでも実施することで、お互いに助け合える環境を作っていけるのではないかと考えている。

《事例③TKG プロジェクト》

戦争や虐待など社会の分断や対立に関心をもっていたが、身近なところに目を向けてみたところ、学校にも対立があることに気付く。校則を守っている生徒と守っていない生徒、先生と生徒の間にある分断や対立をなめらかにするために、「対話」が必要だと考えた。そして、対話が成立するためにはどうしたらよいかについて、臨床心理士の方やルールメイキングサミット（全国のルールメイキングを行う高校生との交流）、校内での２対２の対話のアクションを実施。様々なアクションを通して、対話が成立するための要素を見つけ出した。

◆生徒の感想

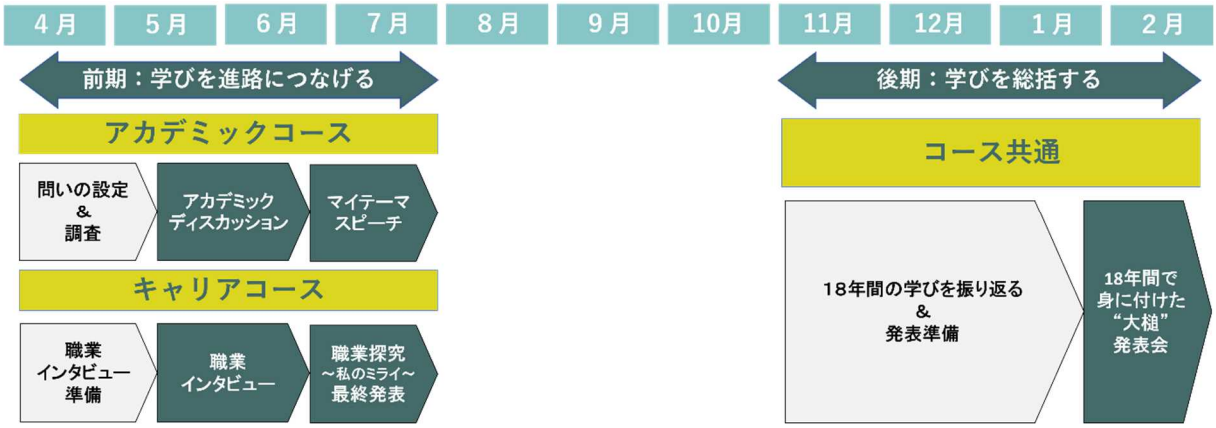
・マイプロジェクトの活動を通して、一人でどこかへ行くことができなかった自分が今ではどこにでも飛んで行って活動出来るようになりました。きっかけと居場所を作ってくれた地域の方々にとても感謝しています。大高に来た目的であるマイプロで全国出場という結果を出せて、心から大槌に来てよかったと実感しています。卒業するまで、地域にもっともっと繋がりが持てるように活動していきたいです。

・自分は内向的な性格もあり、人とのつながりを作ることが苦手だったのですが、マイプロジェクトをきっかけにたくさんの人とつながりを持ち、人と関わることへの苦手意識が減りました。以前は地域の人から声をかけてもらうこともなかったのですが、実際に関わっていただいた方からたくさん声をかけてもらえるようになったことがとても嬉しかったです。これからも今回できたつながりを大切にしながら、自分から新しいつながりを作っていきたいです。

・正直アクションが大変だし思ったように進まなくて悩みました。自分のやっていることは意味があるのかと自信をなくすことも諦めたいと思うこともありました。それでも友達からの応援や先生方のサポート、マイプロジェクトに取り組む仲間達のおかげで、これを頑張ることができたら新しい自分に出会えるのではないかと思えるようになり、乗り越えられました。人前で発表したり、物事を深く考えたりするのが本当に苦手でしたが少し克服できたと思います。また対話について考えるうちに自分の常識を人に押し付けていたこと、人の意見の善悪を勝手に決めつけていたことにも気づくことができました。マイプロジェクトは自分の嫌なことと向き合わなきゃならなくてしんどいこともあるけど、それ以上にやりがいや自分の可能性、成長を感じられる素敵な活動だと思います。大人になってもこの経験を忘れずに常に自分と向き合い、成長できる人になりたいです。そして、より多くの人の幸せを考えられる人になりたいと思います。

ウ　３年生の取組

前期（４月～７月）、後期（11 月～２月）に分けて実施した。前期では、これまでに取り組んできた学習をそれぞれの希望進路へ接続することを目指し、大学・短大進学や公務員を希望する「アカデミックコース」と専門学校進学や就職を希望する「キャリアコース」の２コースで授業を展開した。関心あるテーマの専門家や希望する職種の社会人との対話を通して、自らの現状と将来の在りたい姿を比較しながら進路実現に向けて必要な力を認識することができた。後期では 18 年間の学びの集大成として、これまでの人生で身に付けた力と、様々な経験から得られた知見について語るプレゼンテーションを作成した。最終的には、生徒がそれぞれ自分のプレゼンテーションを１番聴いてほしい方（幼小中でお世話になった先生、マイプロジェクト活動等でお世話になった地域の方等）を招待し、プレゼンテーションを発表した。１年間を通した授業の流れは以下の通りである。



【前期（４ 月～7月）】

（ア）アカデミックコース：「アカデミック・ディスカッション」

a　問いの設定・先行研究調査

前年度のマイプロジェクトで探究した問いをベースに、ディスカッションで話したい問いを設定した。問いを設定する際には、WILL（やってみたいこと）、NEED（興味のある社会課題・学問分野）を書き出すことで、自分のマイプロジェクトがどのような学問分野や研究と結びついているのかを認識した。また、自分の WILL と NEED と関連のありそうな大学・学部学科を調べ、論文検索サイト等を活用して先行研究の調査を行うことで、より進学と接続するような工夫を行った。その後、各生徒がディスカッションを行いたい専門家（大学教授、有識者等）を選定し、メールや電話等でアポイントを取った。

b アカデミック・ディスカッション

生徒自身のテーマと近い分野で研究や実践に取り組む専門家とのディスカッションを下記の 17　テーマで実施した。生徒が３～４人で１組になり、自分のテーマ以外のディスカッションにも参加する形式にすることで、多様な問いについて深く考える機会をつくった。その結果、他のテーマと自分のテーマを関連させて思考し、自分なりの意見を述べる力が身に付いた。

【問い・テーマ、講師一覧】

No	問い・テーマ	講師
1	海洋プラスチックごみが水産業に与える影響	道田豊氏 （東京大学大気海洋研究所教授）
2	児童・生徒の不登校を防ぐために、事前にどのような働きかけができると良いのか	本山敬祐氏 （岩手大学教育学部准教授）
3	震災復興と児童・生徒の心のケア	道岡美和子氏 （岩手県沿岸南部教育事務所エリア型カウンセラー）
4	どうしたら運動嫌いな子どもが運動を楽しめるようになるのか？」	蝦名浩明氏 （岩手県サッカー協会キッズ委員会事務局）
5	地域のつながりは、コーディネーターのような役割を担う人がいないと生まれないのか？	森山円香氏 （ＮＰＯ法人まちの食農教育理事）
6	演劇を用いることによってエンパシー能力は育めるのか？	齋藤夏菜子氏 （福島県立ふたばみらい学園中学校・高等学校教諭）
7	アートが記憶の継承に及ぼす影響について	瀬尾夏美氏 （一般社団法人 Nook 代表理事）
8	最新技術を用いた農業の可能性と課題について	畠山周氏 （ファームビルド株式会社代表取締役社長）
9	ヒトとウミガメのより共生について～ウミガメは本当に保護するべきなのか？～	田中秀侑氏 （認定ＮＰＯ法人エバーラスティング・ネイチャー小笠原海洋センター）
10	磯焼け問題を解決する方法について	芳賀諒太氏 （大槌町産業振興課）
12	「多様性の尊重」という風潮がもたらす影響・問題点～本当の多様性とは何か？～	田中芳隆氏 （江別市生活環境部市民生活課）
13	地域と救命救急医療について	桒久保洋子氏 （大船渡病院救急センター）
14	障がいを持つ人が快適に暮らせる住宅デザインについて	渡邊剛志氏 （株式会社日盛ハウジング盛岡支店）
15	川の生体系を壊さない洪水対策とは？	越田実紀子氏、守屋英海氏、木下亮氏 （大槌町地域整備課）

16	読書は心の安定にどのように影響するのか？	佐々木章氏 （大槌高校スクールカウンセラー）
17	どうしたら医療の担い手不足は解決するのか？	髙橋陽夏氏 （花巻病院地域包括ケア病棟）

c アカデミック・テーマスピーチ

活動のまとめとして、５分間のスピーチを実施した。ディスカッションを通して自分が探究してきた問いがどのように深まり、今後の進路等にどのように活かしていきたいかを発表した。

【生徒の感想】

・最初は専門家と１時間議論することに対して不安を感じていましたが、実際にやってみると時間があっという間に過ぎていて、テーマに対して深く話せる力が付いていることを実感しました。

・私は「エンパシー能力を育む方法」をテーマに探究していましたが、それは「どうしたら運動嫌いな子どもが運動を楽しめるようになるのか」というテーマにも関連することが分かりました。「他者の気持ちを想像する」という点で共通点があることが分かり、私の探究は、他のことにも役立てられる可能性があるということに気づきました。

・講師の方が、ディスカッションの時間だけでなく、今後の学習に役立つ資料や情報を提供してくださったのがとても嬉しかったです。２年生から行ってきたマイプロジェクトと、今回のディスカッションの経験を活かして、希望進路が実現できるように頑張りたいです。

（イ）キャリアコース：「 職業探究～私のミライ～」

a　職業インタビュー

自らが将来なりたい職業の先輩に対してインタビューを行った。インタビューは、仕事の内容やその職業に求められる力などについての質問を中心に行い、自らがその職業に就くために、残りの高校生活で身に付けたい力について考えた。

【職業・事業所一覧】

No	職種	ご協力いただいた事業所名
1	公務員	大槌町教育委員会事務局 学務課
2	製造業	SMC 株式会社釜石工場
3		株式会社エノモト岩手工場
4		株式会社　千田精密工業　大槌工場
5	理学療法士	岩手県立釜石病院 リハビリテーション課
6	調理師	三陸ホテルはまぎく
7	自動車整備士	株式会社　ロータス倉本
8	ケアマネージャー	社会福祉法人　堤福祉会 在宅複合型施設ゆーらっぷ
9	保育士	社会福祉法人堤福祉会 幼保連携型認定こども園　つつみこども園
１０	移住コーディネーター	一般社団法人おらが大槌夢広場
１１	消防士	釜石大槌地区行政事務組合消防本部
１２	食品加工	小豆嶋漁業株式会社
１３	自衛隊	防衛省自衛隊岩手地方協力本部 釜石地域事務所
１４	美容師	hearty hair presents
１５	電気設備士	設楽電気株式会社
１６	スポーツトレーナー	株式会社 Bright Body
１７	看護師	道又内科小児科医院
１８	アパレル	ANAP　池袋サンシャイン店
１９	動画編集	株式会社 Lay-duce

ｂ　身に付けるべき力と自身の経験を紐づける

職業インタビューでの学びをもとに今後身に付けるべき力をまとめ、その力をこれまでの経験の中でどの程度身に付けてきたのかを振り返った。また、現状と理想のギャップを考え、

力を身に付けるために自身が取り組むことの目標設定を行った。

c　最終発表会「 職業探究～私のミライ～」発表会

活動のまとめとして５分間のプレゼンテーションを作成し、校内で発表会を行った。

【生徒の感想】

・職業インタビューを通して、インタビュー前に考えていた職業に必要な力の他に、様々な力が必要とされていることが分かりました。言われたことをこなすだけでなく、状況に合わせてよりよいアイディアを生み出していく力が自分には必要だと感じました。

・これから進学した方がよいか、就職した方がよいか迷っていましたが、インタビューをして、自分の進むべき道がより具体的になりました。自分が将来なりたい姿に少しでも近づけるよう、今から努力していきたいと思います。

【後期（11　月～２月)】

（ウ）コース共通：「私が 18 年間で身に付けた大槌(ハンマー)と知見」

a　オープンダイアログ

発表の内容を考えるにあたり、18 年間で身に付けた力について対話を通して確認する「オープンダイアログ」というワークを行った。このワークは、生徒複数名と、教員１名を加えたグループをつくり、その中から選んだ対象者１名の長所や身に付けた強み等を、残りの生徒と教員で対話を行って見つけるという内容である。自己理解だけではなく、他者からの視点で自分にどのような強みがあるのかを理解することを目的として行った。

b　プレゼンテーションの作成

学校コンセプトである「大海を航る大槌（ハンマー）を持とう」になぞらえ、自身が 18 年間で身に付けた「大槌（ハンマー）＝強み」をテーマとした５分程度のプレゼンテーションを作成した。どの生徒も、最終発表会に向けて一生懸命作成を進めた。

c　最終発表会（令和６年２月 12 日）

最終発表会は、生徒がそれぞれ自分のプレゼンテーションを１番聴いてほしい方を選び、直接電話やメールで招待する形式で実施した。幼稚園・小学校・中学校でお世話になった先生、マイプロジェクトでお世話になった地域の方、他校に進学した友人、保護者の方等、約 50 名の方に集まっていただいた。会の中盤では、生徒とゲストがお互いに手紙を交換し合う時間も設けた。中には、生徒と関わった当時を回想し、成長した姿に思わず涙を流すゲストもおり、参加者がそれぞれの思い出や未来に思いを馳せる温かい場となった。

d　発表資料の公開

生徒それぞれの「18 年間で身に付けた“大槌（ハンマー）”」を紹介する資料とショートムービーを作成し、大槌高校ホームページでの公開や、地域の文化交流施設、ショッピングセンターでの展示を行った。

【生徒の感想】

・オープンダイアログの時間で、友達が自分のことを真剣に話してくれたのが嬉しかったです。小学校の時からずっと一緒だったけど、自分のことをよく見てくれていたのだと感じましました。

・自分の強みは自分だけでは分からなかったけど、オープンダイアログで同じグループの人が話してくれたことをもとに、見つけることができました。

・今まであまり何も頑張ってこなかった自分だけど、高校時代の３年間は、マイプロジェクトも進路も本気で取り組むことができました。熱中できる経験や、それを活かして無事に進路が決まった経験ができて良かったです。これからも、自分が見つけた大槌（ハンマー）を活かして頑張っていきたいです。

・発表会には、中学時代に悩んだ時に、色々と相談に乗ってもらった方を招待しました。連絡する時は緊張したけれども、「もちろん参加するよ」と言ってもらえたのが嬉しかったです。本番も、自分のプレゼンをしっかりとできました。

・発表会はとても緊張したけれども、手紙を読んだ時にゲストの方が涙を流していて、思わず私も泣いてしまいました。これまで色んな方にお世話になったことを実感しました。

・自分のために、わざわざ遠くから駆けつけてくれたことがとても嬉しかったです。高校卒業後も、今日の気持ちを忘れずに頑張っていきたいと思いました。

【最終発表会に参加したゲストの感想】

・生徒さんの堂々とした発表、内容に感動しました。地域の人側も、学ばせてもらい、成長できる機会だと思いました。どの生徒も、自分の強みや個性について深く考えていました。これかの人生においても、他者をリスペクトし、理解しようとする素晴らしい社会人になっていくだろうと感じました。

・このような機会に招待していただきありがとうございました。中学校時代までは、人前で話すことが苦手な生徒たちでしたが、自分なりの言葉を紡ぎ、語る姿に感動しました。「18年間を通して育まれる力の価値」について考えさせられる時間でした。

・生徒は自分の生き方を、自分の言葉で語っていました。この 18 年間で転んで、つまずいて、痛い思いをしたこともありましたが、それを自分事として受け入れ、自分の力に変えている姿を見て、心から成長を感じました。生徒たちと再会できたことに感謝です。大槌高校の探究は、自分の足で歩んでいく術を学べる素晴らしいプログラムだと思いました。

・幼稚園を卒園して以降、なかなか子ども達と合う機会はないので、こういう機会はとても有難いです。子どもたちが沢山の方に支えられてきたこと、保護者さんの思い、先生方の思い、何よりも子ども達自身がしっかりと生きてきたことが実感できる機会だと思いました。毎年続けてください。

・招待してくれた生徒の成長を見られたこと、今後目指していくことをじっくりと聞くことができてとてもよい時間でした。自分がやってきたことが報われた日になりました。これからも地域から生徒たちを応援していきます。